わが子のあゆみ

岐阜県PTAが作る子育て情報機関誌
3
2018.3 No.452
春風号
第69巻5号

【ゴール達成!～校区ウォークラリー～】

岐阜市立境川中学校は岐阜市の最南に位置する生徒数922人の中学校です。一人ひとりが「なりたい自分」を描き、実現をめざしています。境川中学校には伝統として受け継がれている「境中7美（美しい：学習・清掃・合唱・あいさつ・ボランティア・思いやり・目標努力）」があります。行事の時だけでなく境中7美を意識した日常の取り組みを、全校で大切にしようと活動しています。その一つであるボランティア活動も盛んで、地域の様々な行事に多くの生徒がボランティアスタッフとして参加しています。

地域の方々に支えられ、社会に役立つことを生きがいに活躍する人になろうと志をたてて学び続けています。

岐阜市立境川中学校

●【学校の教育目標】

立ち向かい、ひとり立ち

自ら学ぼう・長所を見つけよう・仲間と生きよう

山県市立
富岡小学校

【やまがたしりつとみおかしょうがっこう】

●住所　〒501−2104　山県市東深瀬30番地
●TEL　(0581)22−1050
●FAX　(0581)27−3757
●メール　tomiokasyo@yamagata-gifu.ed.jp
●児童数　322名

学校の教育目標

心豊かでたくましい富岡の子

思いやりのある子
よく考えつくり出す子
進んできたえる子

学校のたからもの

沿革・地域の自然や風土

本校は、明治五年の学制発布に伴い、明治六年に「育文社」を開いたことに始まります。以来一四五年、この地の教育の中心として位置付いてきました。

学校は、山県市の南部に位置し、鳥羽川が流れ、山に囲まれた自然豊かな環境にあります。また、国道一五六号線に加え、現在建設中の東海環状自動車は学校のすぐ北側を通り、学校近くに高富ーC(仮称)が設置されるなど交通網が発達し、今後の発展が見込まれています。

保護者や地域の方々の教育に関する関心は高く、児童の健全な育成について学校行事やPTA活動に協力的です。登下校の見守り活動、朝のあいさつ運動、資源回収や花壇づくりなどの環境整備活動、読み聞かせなど図書活動といったボランティア活動に多くの方から支援していただき、地域に支えられた教育活動を展開しています。

学校のたからもの① 六つの伝統を大切にした富小集会

本校の児童会活動は、「六つの伝統」を重点活動にして行っています。「六つの伝統」とは、『あいさつ』『歯みがき』『読書』『そうじ』『あき缶回収』『わくわく班活動』です。毎年十一月に行われる児童集会を「富小集会」と名付け、この六つの伝統にかかわる内容で集会を開いています。

六つの伝統の一つである『わくわく班活動』とは、一〜六年生までの異年齢集団活動です。縦割り班を全校で十二班編成しています。毎月一〜二回、遊びを行ったり、チャレンジスポーツ-nぎふの種目(8の字なわとび・ボールパスラリー)などを行ったりしています。

今年度の「富小集会」も、執行委員会とわくわく班リーダーが企画運営の中心となりました。集会は、スローガンを「ニコニコスマイル 仲よく 楽しく 六つの伝統を確かめ合おう」として、「思いをつなげ 富小伝統リレー」というゲームを行いました。ペア学年で協力して六つの伝統のボックスに球を入れることで、六つの伝統とは何かを確認しました。リレー方式にバトンをつなぐ競技形式にすることで、異年齢集団の仲間と協力することや、ルールを守って一緒に楽しく遊ぶことの大切さを学ぶことをねらいにしました。

事前準備では、執行委員やわくわく班リーダーを中心に、集会の進行や使用する物の準備に六年生が活躍しました。事前リハーサル会では、ペアの下級生にやり方を教える上級生の優しい声かけがみられました。

競技のやり方を理解した集会本番では、練習の時以上にスピードを上げて競技に取り組む姿が、どのわくわく班でも見られました。六年生を中心に、「しゃがんでよ。」「ジャンプだよ。」「上手だね。」などの励ましの声や認め合う声が、運動場中に響きました。競技の結果が一位から十二位まで発表されました。どの順位であっても、自分たちの班が呼ばれると、拍手をしたり喜んだりする姿があり、スローガンが達成された富小集会になりました。

◀富小集会スローガン

▲わくわく班活動　ボールパスラリー

▲富小集会ゲーム「思いをつなげ　富小伝統リレー」

▲保健委員会による歯みがき励行の劇発表

校歌

富岡小学校校歌

作詞　赤座 憲久
作曲　鷲見 臣一郎

一、清らかに わきでる水よ
白雲を うつす鳥羽川
すこやかな すこやかな
いのち いきづき
富岡の 富岡の
ぼくら わたしたち

二、空高く めざすいちょうよ
校庭を かける人影
いきいきと いきいきと
こころ はずませ
富岡の 富岡の
ぼくら わたしたち

三、ひかりさす ひのきとうげよ
よびあえば 続く山々
あたらしい あたらしい
あすに まむかい
富岡の 富岡の
ぼくら わたしたち

学校のたからもの② PTA主催による親子活動

日曜参観日に、PTA主催による親子ふれあい活動を行いました。各学年のPTA役員さんが、活動内容を考えたり、講師の方と打ち合わせをしたりして、親子で触れ合える活動を行いました。

【一年　歯みがきブラッシング】

歯みがきは、富岡小六つの伝統の一つです。また、本校は、岐阜県学校歯科保健推進校でもあります。全学年、歯科衛生士さんによるブラッシングを年間一回位置付けていますが、一年生では、親子活動として家庭への啓発も含めて歯みがきブラッシングを行っています。

一年生では、六歳臼歯の磨き方を中心に、乳歯から永久歯に生え変わる時期のブラッシングの仕方を教えていただきました。保護者の方も子どもたちと一緒にカラーテスターで染め出しを行い、正しい歯みがきの仕方を学びました。

【二年　親子レク】

講師をお招きし、ボールを使った様々な運動を教えていただきました。二人でできる動きから、ペアで投げたり受けたりする遊びなど、ボールに親しみ楽しく活動できました。親子で体を動かして、いい汗をかいて楽しんだ時間になりました。

【三年　親子で科学工作】

講師をお招きし、あんどん作りに挑戦しました。あんどんの光る材料は、LED(発光ダイオード)です。まずは、枠の木材をボンドで接合しながら製作し、その後、LEDを取り付けました。LEDは脚の長さが違っていて、陽極・陰極を区別することや、その方向が違うと電気がつかないことなどを学びました。作品が完成し、あんどんが明るく光ると、親子に笑顔が広がりました。

【四年　二分の一成人式】

子どもたちは、事前にどんな式にしたいのか願いを出し合い、「感しゃ 決意笑顔 全部たっせい」というスローガンをつくり、練習を進めました。十年間の歴史、漢字一文字による決意宣言、合唱・合奏などを発表しました。子どもから親へ、決意宣言をした色紙を渡すとともに、親から子どもへ、手紙を渡しました。「手紙を読んで涙が出てきた」「これからの十年もがんばっていきたい」という思いになった子どもたちでした。

【五年　防災学習】

講師をお招きし、防災学習を行いました。校区のマップにシールを貼りながら危険箇所を確認したり、普段では何気ない箇所が、実は災害発生時に危険箇所になったりすることの話などを聞いたりしました。災害発生時にどのように対応していくのか、また、自分の命を自分で守るにはどう行動していくのかなどを、親子で一緒に考える時間になりました。

【六年　思春期講座】

講師をお招きし、思春期講座の講話を聞きました。人間の誕生・発育、異性の心と体の理解など、講師より教えていただきました。親子では、なかなか話題にすることが困難な性に関するお話を共に聞くことができました。これから思春期を迎える子どもたちやその親にとって、よりよい親子関係を築いていくよい機会になりました。

▲3年　親子で科学工作

▲4年 2分の1成人式

▲5年　防災学習

大垣市立
牧田小学校

【おおがきしりつまきだしょうがっこう】

●住所　〒503−1602 大垣市上石津町牧田2672
●TEL　(0584)47−2004
●FAX　(0584)47−2020
●メール　makida@ogaki-city.ed.jp
●児童数　98名

学校の教育目標

自分を生かし、共に高まる子

～ちえをみがく子・まごころをつくす子・たくましさをつちかう子～

学校のたからもの

沿革・地域の歴史や風土

本校の歴史は明治六年に薫陶義校として創立され、牧田尋常小学校、牧田高等尋常小学校等の改称を経て、昭和三十年に上石津町立牧田小学校となりました。また、平成十八年に大垣市との合併で現在の校区となっています。

校区の南に牧田川、北に南宮山があり、江戸時代の「九里半街道」が通っており、今でもその名残が多くみられます。また、二又古墳をはじめとする多くの古墳群や、関ケ原合戦で有名な「島津の退き口」にゆかりのある史跡もあり、自然と歴史色豊かな学校です。

学校のたからもの①
「今日もがんばろう！」「学校楽しい！」と思える一日の始まり

本校では児童会の代表委員が朝、玄関に立って「ハイタッチあいさつ」を行っています。朝、学校へ来た代表委員が玄関に並び、笑顔で「おはようございます！」という声と共に登校してくる児童全員とハイタッチをします。「おはよう！いつもにこにこだね」「今日はなんか元気ないけど大丈夫？」とお互いが自然に声をかけ合います。係ではない子も「あいさつボランティア」として一緒に並んで「ハイタッチあいさつ」を実践しています。もやもやした気持ちで学校へ来ても、朝一番に明るく声をかけてくれる仲間がいることで、「今日も一日がんばろう」と牧田小の児童全員が思えるように伝統として続けていきます。

学校のたからもの②
異学年交流と情操教育を大切にした鼓笛演奏

本校では九十八名という小規模校の特性を生かし、一年生から六年生までを縦割りにして行う「なかよし班活動」を実施しています。六年生が中心になってみんなが楽しめる遊びを考え、月に二回昼休みを活用して全校が楽しく遊ぶ活動をしています。

また三年生から六年生による鼓笛を行っています。三年生はダンス、四年生は鍵盤ハーモニカ、五・六年生が打楽器と金管楽器を担当しています。新年度の五月に行われる「運動会」、十月の地域イベント「牧田地区運動会」や「ふれあいかみいしづ」などの場で披露しています。六年生が五年生に楽器の使い方を教えたり、休み時間も自主的に練習したりする姿もあり、児童全員がより美しい演奏をめざして、大変意欲的に取り組んでいます。地域の方も鼓笛演奏を大変楽しみにしていただいています。

▲鼓笛演奏の様子

▲ハイタッチあいさつの様子

校歌

牧田小学校校歌

作詞　高桐 三鈴
作曲　江口 夜詩

一、のぼる朝日がにっこりと　今日もよい子を　呼んでいる
　おはよう　おはよう　みんななかよく手をくんで
　かよう　ぼくたち　わたしたち　明るい楽しい牧田
　牧田小学校

二、清い流れがさらさらと　窓に見えてる　歌ってる
　伸びよう　伸びよう　みんな元気に　健やかに
　学ぶ　ぼくたち　わたしたち　明るい楽しい牧田
　牧田小学校

三、あおいこかぜがそよそよと　いつもやさしく　吹いている
　励もう　励もう　みんなすなおに　朗らかに
　進む　ぼくたち　わたしたち　明るい楽しい牧田
　牧田小学校

▲親子ピカピカ大作戦の様子

学校のたからもの③
地域に根ざした特色ある学校づくり　親子ピカピカ大作戦

五月と九月に「親子ピカピカ大作戦」と称して、児童・職員・ＰＴＡ・自治会による清掃活動が行われます。ＰＴＡや自治会の方々が汗を流して一生懸命掃除してくださる姿を見て、児童は何も言わなくても真剣に清掃に取り組みます。まさに「背を見て育つ」を実践しているといえます。自分が親になった時、同じように動ける人になってくれることと思います。

学校のたからもの④
学校支援ボランティアによる放課後学習

毎週木曜日、学校支援ボランティアの皆さんが「放課後学習」の活動で希望する四年生から六年生の児童に勉強を教えに来てくださいます。本年度は二十五人程度が参加しています。放課後の一時間、分からないところを教えていただいたり、宿題をみていただいたりと個々がそれぞれ自分のやりたいことを行います。「ていねいに優しく教えてもらってよく分かる」「宿題で分からないところも教えてもらえたのですっきりした」と児童には大好評です。

学校のたからもの⑤
安全サポーターによる見守り活動

雨の日も雪の日も緑色のジャンバーを着て、地域の見守り隊（安全サポーター）の方が通学路に立ってくださっています。一㎞以上ある通学路を毎日一緒に歩いてきてくださる見守り隊の方や、下校時刻に合わせて校門の横へ来てくださる方もいらっしゃいます。登下校の安全を見守るだけではなく、いつも笑顔で児童に優しい言葉をかけてくださる見守り隊の方々には児童の心も見守っていただいています。見守り隊の方だけではなく、地域のおじいちゃんおばあちゃんも玄関先で「気をつけてね」「いってらっしゃい」と声をかけていただいています。「牧田の子どもは宝、みんなで守る」という温かく強い思いが伝わってきます。

学校のたからもの⑥
郷土愛を育む「ふるさと大垣科」・地域指導者によるクラブ活動

本校では郷土について学ぶ、「ふるさと大垣科」の授業の中で、俳句の指導者の方に来ていただき、題材の見つけ方や季語を入れた俳句づくりを学んでいます。

また、低学年では、ふるさと出身の絵本作家の作品に親しむ活動、中学年では、ふるさとの祭りや物づくり、生き物等を調べる活動を、高学年では、ふるさとの特色ある自然や産業について知る活動を行い、体験を通して、自分のふるさとに誇りや愛着をもつようになってきました。

クラブ活動では「お囃子」・「生け花」・「切り絵」など、地域にお住いの専門的な知識や技能をお持ちの方に指導をしていただいています。本校の玄関には「生け花クラブ」の児童が活けた生け花が年間を通して飾ってあります。児童が興味関心をもって取り組むクラブ活動に、地域指導者の方と楽しく交流しながら教えていただくことで、生き生きと活動することができています。

◀放課後学習の様子

▲もちつき体験の様子

▲見守り活動の様子

飛騨市立
神岡小学校

【ひだしりつかみおかしょうがっこう】

●住所　〒506−1161　飛騨市神岡町船津225
●TEL　(0578)82−1272
●FAX　(0578)82−1217
●メール　kamioka-1217@school-hida.jp

●児童数 286名

学校の教育目標

自ら考え 仲間とともに
やりぬく たくましい
神岡の子

学校のたからもの

沿革・地域の自然や風土

本校は平成十七年に、山田小学校、神岡東小学校、神岡西小学校の三校が統合し、新たに神岡小学校としてスタートしました。

学校の教育目標「自ら考え　仲間とともに　やりぬく　たくましい神岡の子」を具現するために「つたえる」を合言葉に「考え」「やさしさ」「自分の行動」を伝えられる子の育成に取り組んでいます。

校区は豊かな自然に恵まれ、古くから鉱山の町として栄えました。近年では、その鉱山の地下を利用して、東京大学宇宙線研究所がスーパーカミオカンデでニュートリノの研究を行っています。また重力波の観測ができるようKAGRAの整備も進んでいます。

校歌

神岡小学校校歌

作詞　池野 文雄
作曲　倉野 昌三

一、飛騨の山脈　四方に見て
薫る緑の　そよ風に
光るさざ波　高原川
歴史豊かな　文化の町に
輝く理想　神岡小学校

二、桜咲く道　手をつなぎ
集うわれらの　学び舎で
永久の友情　誓い合う
組んだスクラム　心と心
広がる歓喜　神岡小学校

三、流れゆく雲　青い空
学び鍛える　この校庭で
胸に希望と　夢いだき
宙に伸びゆけ　大樹のように
われらの誇り　神岡小学校

▲神岡の伝統民謡「太子踊り」を受け継ぐ

学校のたからもの①
学校の三本柱に向けた取り組み

本校では、宝物づくりの取り組みとして「授業」「挨拶」「掃除」の三本柱を大切にしています。

①授業…特に「相手の目を見て　だまって最後まで聴くこと」と「結論に根拠をつけて話すこと」を大切にしています。児童は、相手が伝えたいことをきちんと理解しようとよく聴きます。このことは、相手のことを思いやることにもなります。

また、根拠を明らかにして自分の考えをノートに書いたり仲間に話したりしています。時間いっぱい真剣に考え、発表するときには、「～だと思います。訳は…。」と根拠を基に説明できる姿に高まってきています。

②挨拶…「おはようございます。」朝の学校に元気のいい声が響きます。児童の登校時には五・六年生の生活委員が外に立ち、挨拶で仲間を出迎えるのです。元気よく大きな声での挨拶は児童の自慢です。さらに、相手の目を見て相手を思いやる気持ちが伝わるような挨拶をしようと意識して取り組んでいます。

③掃除…児童は、思いやりの気持ちを自分たちの校舎に対しても表そうと掃除に力を入れ、「ムダ口ゼロ掃除」をしています。時間いっぱい黙ってすみずみまできれいにする上級生の姿を見て、下級生もムダ口ゼロ掃除が身についてきました。こうやって学校で大切にしていることは受け継がれていくのです。

▲自分の考えを伝え合う授業

▼校舎と心を磨く「ムダ口ゼロ掃除」

学校のたからもの②
ふるさとの人の願いに触れる体験学習

神岡町の人々は、それぞれの立場で様々な取組をしています。児童は、取組の内容だけでなく、「それぞれの願いを持って取り組む人々の姿そのもの」に触れています。この人々の生き様そのものが、神岡町の「かけがえのないふるさと」です。そして、小学校で学んだふるさとの良さが本校で大切にしている「つたえる」ことを通して中高につながり、ひいては飛騨市で目指す「ふるさとを愛したくましく生きる力を育む」ことにつながっていきます。そのような考えに立って、次のような体験学習をしています。

◇**一年生**…レールマウンテンバイクの考案者の願い（乗車体験・考案者のお話）
◇**二年生**…水屋を守る人々の願い（街並みガイドによる水屋探検・地域の水屋を守っている方のお話）
◇**三年生**…地域の民謡を保存する人々の願い（保存会員による神岡民謡体験・会員のお話）
◇**四年生**…地域で活躍する技術者の願い（「春慶塗体験」「木工で椅子づくり体験」・春慶塗師、木工所の方のお話）
◇**五年生**…地域の自然を守るインタープリターの願い（「天蓋山登山」・インタープリターのお話）
◇**六年生**…地域の自然を紹介する研究者の願い（「ひだ天文台の見学」・天文台管理者のお話）
◇**全校**…小中高合同活動とそれに込められた願い（小中高合同あいさつ運動・高校生の話）（神岡中学校吹奏楽部演奏会・飛騨神岡高校ロボット部体験学習）

学校のたからもの③
「保育園からつなぎ、中学校・高校へつなぐ」保小中高の連携

子どもたちは、「連続的に」学び、成長するものであるという考えの上に立って、子どもたちの「これまで」と「これから」を常に意識して保小中高の連携教育を進めています。

①「保小中めざす姿の系統性」を整理

義務教育の出口の姿を見据え、生活面では、「自分の力でやりぬく」ことと「あいさつ」を、学習面では「聴く」「話す」「話し合う」ことを重点として「保小中めざす姿の系統性」を整理しまとめました。これをもとに、保小中のつなぎを強めていきたいと考えています。

②相互保育、授業参観・合同研究会

職員は保育参観、授業参観を通じて、「めざす姿」にもこだわって交流を行いました。「相手の目を見て聴く姿勢」や「正しい姿勢」の成長を確認するとともに、どのような指導をしてきたのかを互いに学びました。

③地域ぐるみのあいさつ運動

地域ぐるみのあいさつ運動は、飛騨神岡高校のＭＳリーダーズが中心となり、年二回、それぞれ一週間ずつ実施しています。中学生と高校生のリーダーが朝、小学校に来て、登校する小学生にハイタッチしながらあいさつをします。また、小学生のリーダーは交代で中学校に出向いてあいさつ運動に参加します。

④保小中合同引き渡し訓練

実際に災害が起こったときには、保小中が同時に対応しなければなりません。より実際の場面に即した対応をするために、保小中が同一日、同時刻に子どもの引き渡しをする訓練を行いました。

⑤子ども同士の直接交流

一年生は、国語の学習で、「音読劇を保育園の子に見てもらおう」という言語活動を設定しました。園児の前で、どの子も張り切って音読劇を発表することができました。園児からは大きな拍手をもらい、大きな達成感を味わいました。

このような実践を通して、「神岡の保小中高は一つ」という意識を私たち職員がさらに強くもつことができるようになってきました。

▲春慶塗の技と後世に伝える願いを学ぶ

▲レールマウンテンバイク乗車体験

▲心をつなぐ「地域ぐるみのあいさつ運動」

▲園児に音読劇を披露する1年生

関市立
桜ヶ丘中学校

【せきしりつさくらがおかちゅうがっこう】

●住所　〒501−3931　関市桜台3丁目13番1号
●TEL　(0575)24−6071
●FAX　(0575)24−7974
●メール　sakura-jh@edu.city.seki.gifu.jp
●生徒数　502名

学校の教育目標

仲間と共に心身を鍛え
自らを高める生徒

学ぶ意欲
思いやる心
やりぬく力

学校のたからもの

沿革・地域の自然や風土

関市立桜ヶ丘中学校は、旭ヶ丘中学校と緑ヶ丘中学校のマンモス化に伴い、昭和六十二年に分離統合して開校した全二十一学級、全校生徒五〇二名の学校です。平成二十八年度には開校三十周年をむかえ、PTAの方々の協力を得て記念式典を行いました。

学校は関市南部の閑静な住宅街の中に位置していますが、北部には水清き津保川が流れ、南部には緑豊かな迫間山がそびえるなど、自然豊かな校区です。

学校のたからもの① 生徒の主体的な活動

本校では、地域社会への貢献、生徒会を中心とした合唱など、質の高い文化を生徒が主体的に追求することで、学校生活に活力と安定を与えています。

①合唱の取組

文化委員長の発案で、三年生有志が「合唱し隊」を結成し、五月に中庭コンサートを行いました。中庭いっぱいに歌声がこだまし、合唱のよさが校内に広まりました。三年生有志に触発された二年生有志も、始業時間前等に合唱の練習をしています。

三年生「合唱し隊」は、桜ヶ丘ふれあい文化祭でも合唱を披露し、盛大な拍手をいただきました。

②公民館活動へのボランティア参加

田原ふれあいセンター主催の「チャレンジ！七夕祭り」に、実行委員として四十一名の生徒が参加しました。企画立案、チラシ作成、同報無線・保育園訪問による参加の呼びかけ、体験コーナー運営等に取り組みました。

また、桜ヶ丘ふれあいセンター主催「桜ヶ丘ふれあい夏祭り」、各地区ふれあいセンター主催「ふれあい文化祭」、中部学院大学主催「たのしみん祭」においても、ボランティアとして運営に協力しました。

有志による合唱の取組、公民館活動などへのボランティア参加が地域に役立つ存在であると認められ、平成二十九年度関市青少年育成市民大会にて善行表彰されました。

▲合唱し隊

▲ボランティア

桜ヶ丘中学校校歌

校歌

作詞　加藤茂
作曲　兼田敏

一、山うつくしく　水清き
ここ美濃関に　青雲の
高き理想を　胸に秘め
あした夕べに　たゆみなく
学びの道に　いそしむわれら
桜ヶ丘中　ここに立つ

二、明るく日がさす　丘の上
流れる雲を　仰ぎつつ
心はぐくみ　身を鍛え
新しき道　きりひらく
誓いも固く　努めるわれら
桜ヶ丘中　ここに立つ

学校のたからもの② 生徒が創り上げる授業

教科係長会を中心に、日々の授業を振り返りながら仲間と学ぶ学習集団づくりに取り組んでいます。教科係長会でクールごとに重点項目を決め、全校の生徒がその取組にかかわっています。

①パワーアップ学習

本校では、授業の始まる二分前から、教科係長、教科係がパワーアップ(PU)学習を進めています。PU学習は、前時までの復習や本時の学習で必要となる知識の定着を確かめる問題を出題し、学び合う時間です。また、学習の三本柱である「気持ちのよい学習のスタート」「視聴率一〇〇%」「堂々と発表」のレベルアップをめざし、教科係長、教科係の呼びかけにより、生徒が創り上げる学習づくりをめざしています。

②団別授業交流会

体育大会で同じ団になった三学年の縦割り組織内で、三年生の授業を一、二年生が参観する団別授業交流会を行いました。交流会に先立ち、三年生のめざす授業像を一、二年生に伝えたうえで、一、二年生が三年生の授業を参観しました。参観後に一、二年生は三年生から学んだこと、自分たちの学級に取り入れたいことを学級で交流し、次のような感想を三年生に伝えました。

「挙手の呼びかけでなく、挙手できない仲間のところまで行き、挙手できるように声をかける姿がよかった」

「一人ひとりの意見の内容が濃く、分かりやすかったので、お手本にしていきたい」

各学級でめざす授業の具現に向けた生徒の意識や学習姿勢を高め、体育大会と常時活動のつながりを理解できた団別授業交流会でした。

▲団別授業交流会

学校のたからもの③ 学校を支えるPTA活動

本校のPTAは、「共学・共進」をスローガンに、子どもと共に学び、共に人としての歩みを進めることをめざし、全会員の協力のもと学校教育を支える数多く活動に継続的に取り組んでいます。熱いPTA活動は、桜ヶ丘中学校の伝統となっており、その一端を紹介します。

①生徒会との懇談

生徒の声を大切にしてPTA活動を運営することを目的に、資源回収の後に、本部委員会が生徒会と懇談を行い、生徒会活動を報告したり、生徒会からPTAへの要望を聞いたりしています。今年度は、生徒会から要望のあったボール籠を購入しました。また、各学級で取り組んでいる合唱練習に使用できるよう、CDデッキの購入計画を立てています。

②自転車点検

広い校区をかかえる本校では、七十%近い生徒が自転車で通学しています。また、全校生徒が参加して関市文化会館で行う合唱交流会、二年生生徒の関商工高等学校半日入学、職場体験など、自転車を利用する機会が全校生徒にあります。そこで、保健安全委員会は、学級委員会とタイアップして、六月に全校生徒の自転車を点検しました。災天下のなかでのブレーキの点検、未整備生徒への自転車整備の依頼文書配布など、生徒全員が安全に自転車を使用できるよう活動しました。

Contents

岐阜県PTAが作る子育て情報機関誌
平成30年3月1日発行／第69巻5号
通巻第452号

わが子のあゆみ

2018.3 No.452 春風号

表紙　岐阜市立境川中学校

学校のたからもの　1
山県市立富岡小学校／大垣市立牧田小学校／飛騨市立神岡小学校／関市立桜ヶ丘中学校

わが家の宝物　岐阜市立三輪南小学校ＰＴＡ　会長　小澤誠　9

特集　**「被災地に学ぶ」交流活動体験記**　11
岐阜市立藍川東中学校（山下和真・中埜夏一）岐阜市立厚見中学校（奥田帆香・河田更紗）
岐阜市立加納中学校（前川菜摘・林凜理子）大垣市立北中学校（淺井美咲・橋本玲）
可児市立蘇南中学校（松下萌唯）中津川市立付知中学校（早川萌詩）
本巣市立根尾中学校（林空良・大堀みつき）岐阜市立東長良中学校（内田愛華）

家庭教育応援団！㉚　21
「わが家わが町家庭の日発表会」編

「多様性尊重の教育⑤」シリーズ　みんな、いっしょに　23
岐阜聖徳学園大学教育学部　安田和夫

連載　PTAのABC（PTAの生い立ち⑤）　25

私が出会った1冊の本【続35】　27
美濃加茂市立加茂野小学校ＰＴＡ　会長　田辺明弘
山県市立高富中学校ＰＴＡ　会長　玉井薫

保健室ノート
土岐市立泉中学校　養護教諭　水野洋子　29

私の先生㉚
関市立安桜小学校　校長　長瀬秀子　31

子育て半生記
関市立瀬尻小学校ＰＴＡ相談役　後藤豊郎　33

本巣市のPTAふれあいニュース［vol.10］　35
本巣市立外山小学校ＰＴＡ
本巣市立弾正小学校ＰＴＡ
本巣市立一色小学校ＰＴＡ
本巣市立糸貫中学校ＰＴＡ

わが家の約束　37
川辺町立川辺東小学校ＰＴＡ　母親委員長　松下えりか
瑞浪市立釜戸中学校ＰＴＡ　母親副委員長　藤田瑞穂

子の思い・親の願い・教育の窓　39
子の思い
海津市立今尾小学校　3年　髙木音瑠
瑞穂市立生津小学校　6年　溝口慶
瑞浪市立瑞浪中学校　3年　後藤由佳
親の願い
岐阜市立茜部小学校ＰＴＡ　会長　森健一郎
各務原市立鵜沼中学校ＰＴＡ　小森明
教育の窓
郡上市立大和西小学校　教頭　冨村竜也
大野町立揖東中学校　教頭　小野直子

親子ではてな　44
お試しクッキング　岐阜県学校栄養士会　46
友禅ごはん

ふるさとの伝承　47
高山市立花里小学校

きらり！キッズ！　49
神戸町立南平野小学校

夢中！熱中！我らが部活　51
下呂市立下呂中学校

私たちのPTA　53
美濃加茂市立山之上小学校ＰＴＡ

わが家の宝物

岐阜市立三輪南小学校PTA会長
小澤 誠

子どもの成長する姿

小学四年生の息子は、活発な性格ではありませんが、こつこつと頑張るタイプです。小学校に入ってからはサッカーを続けています。

今までほとんど休まず参加していることは、何かを続ける自信になっていると思います。

幼稚園年中の娘は、いろんなことに挑戦するのが好きで幼稚園で新しいことを教えてもらうと嬉しそうです。特に体を動かすのが好きで、体育教室に通っており、最近は縄跳びを頑張って練習しています。

これからも、二人とも色々なことにチャレンジして、成長する姿を見せてくれることを楽しみにしています。

まだまだ手がかかり、目を配る必要があります。これから、子どもの成長に伴い、手が離れ、目も離すことになります。

しかし、心だけは寄り添い成長を見守り、応援していきたいと思います。

「被災地に学ぶ」交流活動体験記

東日本大震災から６年５か月を経過した平成29年８月３日～５日、岐阜県ＰＴＡ連合会は「被災地に学ぶ交流事業」として、県内の中学生８校13名の中学生を宮城県に派遣し、東松島市立矢本第二中学校と同石巻市立牡鹿中学校への訪問交流、被災地視察を行いました。

交流活動に参加した生徒は、各々学校や地域に戻って体験から得た思いを報告し、防災活動へと発展させました。参加した中学生の体験記を紹介します。

交流事業で感じ、学んだこと

岐阜市立藍川東中学校三年
前期生徒会長　**山下 和真**

私は、この研修で多くのことを学びました。行く前は、「もう復興は終わりつつあるのではないか」などと考えていました。しかし、研修で見た多くの景色が想像とは全く異なるものでした。復興が進んでいるのはごくわずかな地域だけであり、震災から六年がたった今でも仮設住宅で暮らす人が多くいらっしゃいました。当時、つらい思いをされた語り部さんの話を聞いたり、多くの被害を受けた大川小学校を訪問したりしました。震災後の今を取り上げたニュースなどは、よく目にして分かっているつもりでしたが、現地に行ってみると想像もできなかった雰囲気が感じられました。自分の目で見て、耳で聞き、体で感じたものは実際に訪問してみないと分からないことがいくつもありました。こんなに普通に生活していてよいのか、もっと一日一日を大切にしていかなければならないのではないかと強く思いました。

自分たちが見てきたもの、感じてきたことをありのまま多くの人に知ってもらいたいと思い、学校で報告会を行いました。報告会では、「この震災の悲劇から学んだことを次に生かし、今、自分たちにできることから一つずつ行っていこう」ということを伝えました。生徒の中には、震災を忘れかけていた人や、防災について考えていなかった人などが多くいました。しかし、この報告会を通して、考えが変わった人、自分にできることを探してみたいと感じた人などが多くおり、とても意味のある報告会にすることができたと思います。

震災から六年がたち、忘れられようとしています。しかし、決して忘れてはならないことです。いつ自分の身に災害が起こるか分かりません。だからこそ、一人ひとりの被害が少なくなるように何ができるのかを考え、備える必要があります。今回の研修で感じ、学んだことを多くの人に知ってもらい、防災について考えるきっかけになればよいと思います。自分たちにできることを自ら考え、行動していく。これこそが、私たちのするべき義務なのではないかと思います。

今、自分たちにできること

岐阜市立藍川東中学校三年
議員　**中埜 夏一**

私は、八月に東日本大震災被災地中学校との交流事業に参加しました。

私たちは、東松島市立矢本第二中学校と石巻市立牡鹿中学校の生徒の皆さんと交流したり、大川小学校の視察や語り部さんのお話を聞いたりしました。

被災地中学校との交流では、どちらの中学校も震災後新たに考えられた活動を行っていました。震災の経験を生かし、命を守るための工夫した活動を行ったり、地域住民の方々とのつながりをより深いものにし、地域に積極的に貢献する活動を行ったりと、その内容は三者三様でしたが、どちらも中学生自らが行動していました。

避難所の運営では、生徒会を中心として、各委員会に役割が割り振られ、震災後の地域の中心として動くことが求められました。訓練では、役割通りに行動しており、震災の経験を無駄にせず、将来のために活用できていました。

このような立派な活動を僕と同世代の中学生たちが中心となって行っていることに、驚きが止まりませんでした。このお話をしてくださった生徒の皆さんが、自分より年上のように見えました。また、生徒全員がすべての防災グッズの組み立てができるということも聞きました。実際、私もどういう防災グッズがあるのか分からなかったですし、教えてもらわなければ一人で組み立てることはできませんでした。体験した防災グッズはどれも簡単に組み立てることができ、しかも災害時には役に立つものでした。

新しいことを学ぶことができたのはとても嬉しいですが、同時に危機感を抱きました。もし、災害が現実に起きればこのような知識が必ず必要になります。私の学校では避難訓練を何度も行ってきましたが、防災グッズを組み立てたことがないので、おそらく、組み立てることのできる生徒はいないと思います。そもそも、防災グッズ自体を知らない生徒が多いでしょう。この地域で大きな災害が発生していないからといって、この先も起きないとは言い切れません。

このように、たくさんの体験をすることができた交流事業のことを、中学校との交流会で学んだこと、語り部さんのお話を聞いたり大川小学校を訪れたりして僕たちが思ったこと、宮城県の町の様子などを私たちは学校に戻り、報告しました。この報告会は、新聞や地域の広報誌で取り上げていただいたことで、「被災地を訪問したくなった」という声も届いてきました。被災地を訪れたり、もっと知ろうと思ったりする人が増えてほしいです。

生き抜く

岐阜市立厚見中学校二年
後期生徒会長　**奥田 帆香**

東日本大震災が起きたとき、私は小学一年生でした。テレビ越しに見たあの津波からは幼いながらも人々の動揺と恐怖が伝わってきました。

中学二年生になった今、テレビなどを通して震災について知っていくうちに、「自分の住むこの町にあんなにも大きな災害が起きたとき、どうすれば皆が助かるのか」と考えるようになりました。そのヒントを自分で見つけたいと思い、この事業に参加することにしました。

私が三日間の活動を通して最も心に残ったのは、「みらいサポート石巻」での活動です。語り部の佐藤麻紀さんの話からは当時の様子がよく想像でき、思わず涙があふれ出ました。さっきまで当たり前のように過ごしていた町を一瞬にして飲み込んでいく津波の恐ろしさ、そして家族を失う悲しみが麻紀さんの話し方や表情から強く感じられました。麻紀さんは最後に「日頃からバラバラの時はどう逃げるのか、命を守る相談を家族で必ずしてください」とおっしゃいました。防災の基本である普段からの備えの大切さを改めて実感しました。

矢本第二中学校、牡鹿中学校の生徒たちは防災、減災についての理解がよくできていて驚かされました。矢二中ではヘッド・ハート・ハンズの「３Ｈ」を、牡鹿中では『笑顔創造プロジェクト』を行ってい

ます。どちらも地域に貢献したいという思いで活動しています。実際に震災を体験した怖さやその救助活動を通してもらった優しさが活動の原動力になり、さらに「中学生の自分たちが自ら動いていかなければ」という責任感となっているのだと思いました。

震災から六年がたった今、ここまで復興できたのは被災後の人々の気持ちが大きく関係しているのではないかと思います。「震災になんか負けない」、そんな思いを込めてつくられたのが『がんばろう石巻』です。この看板のように絶対に生きてやるという強い意志を持つことが自分の命を守り抜くこと、復興していくことに繋がるのです。

様々な活動を通して中学生には地域を活気づけることができるほどの力があることを学びました。大きな災害が起きた時、私たちは自助し、共助し、そして中学生として公助していかなければなりません。災害は突然起きます。だからこそ、普段から十分な備えをし、一回一回の訓練を意味のあるものにしていくべきだと思いました。

今、私たちにできることとは

岐阜市立厚見中学校二年
後期生徒会副会長　河田 更紗

小学一年生の時の記憶です。予定黒板や蛍光灯がゆれ、教室中が騒然としていました。それが東日本大震災という大きな地震だということは後で知りました。クラスの皆が先生の指示でいっせいに机の下にもぐりながら不安と恐怖をこれらを全校に伝えたいと思いプレゼンテーションと校内掲示の作成を行いました。これからはＤＩＧで分かった危険箇所等を地区生徒会でも共有し自分たちの判断力・決断力をより一層高めていきたいです。そのためにアゴラを活用し、各委員会で様々な想定に対する対処法を考えてもらい、まとめたものを掲示して防災についての理解を深めます。この貴重な体験で学んだことを私たちの町を災害から守るために生かしていきたいと思います。

感じていました。あれから、もうすぐ七年。私たちに何ができるのか。そして津波から何を学び、今後に活かすことは何か。宮城に行き確かめたいと思いこの交流事業に参加しました。

最初に矢本第二中学校に訪れました。そこでは私の知りたかった「何ができるのか」と「今後に活かすこと」の二つを見つけることができました。この中学校では防災力の向上をめざし生徒たちが多くの活動をしていました。地域と連携したショート訓練や清掃活動。防災コーナーの設置。生徒会が企画運営をし、活動していました。こういった活動を通して、日頃から危機意識を忘れずに過ごしていることが分かりました。また、震災の際に支援物資があまり届かず多くの方が苦しんだ経験から、今では空き教室を防災倉庫として使い毛布や水、車椅子などが準備されていました。私はここで、一人ひとりにこの大震災を忘れてほしくないという生徒たちの強い思いを感じました。

二日目に牡鹿中学校に行きました。ここでは、児童や生徒が防災の課題について考え、「知る」を目標として活動していました。だからボランティアを積極的に行い人とのつながりを大切にしたいと思いました。

次にみらいサポート石巻に行きました。語り部の佐藤麻紀さんの話には深い悲しみと苦しみを感じました。涙がこぼれ落ちました。麻紀さんの「当たり前は津波で消えてしまう」その言葉から日々の大切さやありがたさが体中にしみわたりました。私たちの学校の生徒会スローガンは「日常～仲間と成長・仲間と向上～」です。麻紀さんのその言葉を聞き「災害はいつ起こるか分からない」何度も聞いたこのフレーズですが、改めて日常を大切にして過ごすことの価値を気づかせてくれました。

最後に私は初めて震災当時の姿をそのまま残している大川小学校に行きました。見ただけで怖さや改めて津波の大きさを感じさせてくれた大切な場所です。崩れ落ちた校舎。私の学校がこんな形になってしまったらと考えるだけで震えが止まりませんでした。悲しさと怖さが入り混じった感情は今までの私にはなかったものでした。

この研修から私は大きな災害にもかかわらず自分たちでつながり活動することの大切さを学びました。今回感じたことを学校でも生かせるように防災コーナーの設置をしたいと思います。過去のＤＩＧを掲示したり、防災に関する記事を掲示したりして、矢本第二中学校のように中学生としてできる防災力の向上を目指していきたいです。

未来に向かって

岐阜市立加納中学校三年
前期生徒会報道局長　前川 菜摘

私は「東日本大震災被災地中学校との交流事業」を通して、震災の恐ろしさ、威力の大きさなど、今まで考えていたことがより深くなったと感じています。実際に現地へ行ってみると、場所によっては、被災地であったことを忘れるくらい復興しているように見えました。しかし、それは形だけで、心に残った傷は六年経っても消えていないのだと感じました。そんな心の傷を抱えながらも、多くの人が復興へと動き出し、自らの手で復興の動きをつくっていました。大震災の経験を踏まえて、未来につなげようと前向きに行動している姿から、強い心をもって歩んでいると感じ、自分自身はどうかと考えさせられました。今の私は、辛いことがあるとすぐに心が折れて、過去を引きずってばかりです。大切なことは、何か起きた時に、その事実や感じたことを忘れたり引きずったりするのではなく、その事実や思いを胸に、未来へ「自ら」動き出すことだと思いました。

実際に交流事業に参加して学んだことの中から、「自ら」未来へ動き出して行われている活動を二つ紹介します。

一つ目は、震災時の避難の様子から見えてきた課題の解決に向けて、ショート避難訓練や避難所の運営の対策等を生徒の手で行っているということです。この活動は、自らの命を守るとともに、地域の人々の命も守ろうとするあたたかい思いから生まれました。

二つ目は、未来の地域を明るくしようと「笑顔創造プロジェクト」を行っているということです。このプロジェクトは、地域の人々の笑顔を増やし、未来を明るくするために、地域の環境を整えたり清掃を行ったりする活動です。私は地域の未来のために、自分たちの力で動こうとする強い思いを行動に移しているという点が素晴らしいと思いました。

先ほど紹介した二つの活動からは、中学生が地域の人々と日常的にコミュニケーションをとって、「次は自分たちが地域の人々を守る」という固い意志が伝わってきます。私の通っている加納中学校でも、震災に対する命を守る訓練やＤＩＧ（図上防災訓練）活動を行っていますが、私たちと東北の人々との大きな違いを感じました。その違いとは、「意識の差」です。つまり、どの活動においても、本当に震災が起こったことを想定しているのかということです。私たちは、本当の地震の恐怖を知りません。だからこそ、東北の人々からの教訓を聞いて、自分たちに生かしていくことが大切だと考えます。

私は、震災に遭われた人々が味わった辛い気持ちや寂しい気持ちを絶対に無駄にしたくはありません。私が東北の地を訪れて学んだことを、これからも周りへ発信し続け、自分たちで命を守る未来をつくっていきます。

東北の地を訪れて

岐阜市立加納中学校三年
前期生徒会文芸部長　林 凜理子

震災から六年も経ち、テレビでも復興した街の様子が報道されていて、震災の傷跡はほとんどなくなっているものだと思っていました。実際に現地へ行ってみると、仙台駅はとても美しく、テレビで見た地震が嘘のようでした。しかし、海の近くを訪れた時、本当の被害を知りました。何も建ってい

ない、だだっ広い草原のような空間があり、ところどころにむき出しのコンクリートや家の土台がありました。何だかその土地の様子は寂しそうに感じました。そして、「ここにあった家はすべて津波に流されたんだ」と改めて理解しました。六年経った今でも仮設住宅で暮らす人々がいて、がれきの大きな山がいくつもあります。復興は全然進んでいないと実感しました。

私は、宮城県雄勝町に住む佐藤麻紀さんの話を聴きました。佐藤さんは、津波で母親と祖母を失い、家も全壊した方です。佐藤さんは震災当時の話を一時間半もかけて丁寧に話してくださいました。私は今でも佐藤さんの話を忘れられません。話を聴きながら、家族がいなくなる恐ろしさを感じて涙が止まりませんでした。大切な人が生きていることが、どれだけありがたいことなのかを深く考えさせられました。

佐藤さんの話を聴いて大切にしたいと感じたことが二つあります。一つ目は、自分自身で「知る」ということの大切さです。佐藤さんは「被災者という言葉でまとめないでほしい」とおっしゃっていました。被災された方々の中には、家族が無事だった人、家が流されてしまった人、少しの被害で済んだ人、そして佐藤さんのように家も家族も失ってしまった人など、いろいろな方がいます。同じ被災者でも失ったものの大きさが全く違います。「被災者」という言葉で傷つく方々もたくさんいらっしゃるそうです。このように聴くと、私たちは本当に被災された方々のことを思いやっていたのかと自分自身に問い正したくなりました。また復興についても、テレビの報道とは違って全然復興していないと感じました。この事実は私が実際に東北の地を訪れたからこそ知ることができた事実です。私は、周りの意見に惑わされずに自分の目や耳で事実を知ることの大切さを学びました。

二つ目は、「当たり前」の大切さです。毎日学校に通えること、友だちに会えること、家があること、ご飯が食べられること、水が飲めること、安心して眠れること、家族が生きていること、そして、自分がいること。今も日本や世界には当たり前でない人々がいます。私たちも明日になれば当たり前としていたことがなくなるのかもしれません。私は、いつ失うか分からない当たり前に感謝して一日一日を精一杯大切にして生きていくことを誓いました。

東北の地を訪れて学んだことを、私は一生の宝物にします。

防災の知識と意識を高めるために

大垣市立北中学校三年
浅井 美咲

私は東日本大震災被災地中学校との交流事業に参加しました。矢本第二中学校と牡鹿中学校の二校を訪問し、同じ中学生から、震災発生当時の様子を聞いたり、甚大な被害を受けた大川小学校の視察をしたりしました。被災の様子が生々しく語られ、想像を絶するような話にとても心が痛みました。そこには、震災を乗り越え、復興へと向かう町と力強く生きる被災地の中学生がいました。

矢本第二中学校には、随所に津波浸水表示板がありました。そこには、「記録として残すため」、「伝承していくため」、「啓発活動のため」そして、「現在のため」という四つの意味が込められているそうです。また、防災の知識を高めるために、3H（HEAD：頭）防災の知識と意識を高める、（HEART：心）お客さんにならない判断力と決断力、（HANDS：手）地域の方と顔見知りになるコミュニケーションやアクションを大切にして防災訓練を行っていました。

牡鹿中学校は、クラスごとに防災マップを作っています。自分たちの手で防災マップを作ることで、全員が避難所の場所を知り、危険個所を把握することができると考えたそうです。そして、その防災マップは誰もが目のつく所に掲示してありました。今後起こりうる防災への備えのために、自助（命を守る行動、自分の命は自分で守る）、共助（助け合い、共に生きる）、公助（救助・支援・復旧・復興に向けた基盤作り）、心のケア（心に寄り添い、健康を保つための取組）という四つのことを意識して取り組んでいました。それだけでなく、両校共に防災のための備えも十分されていました。これらの交流や視察から、私たちがあまりにも自然災害に対して、甘い考えであることを痛感しました。

私はこの交流から、学校に二つの提案をしました。一つ目は、ショート避難訓練の実施です。ショート避難訓練とは、予告なしで行う訓練のことです。生徒会で訓練の計画を進め、「いつでも・どこでも・どんな状況でも」正しい判断をするためにこの訓練を取り入れたいと考え、十一月にショート避難訓練を実施しました。突然の放送に初めは戸惑う姿もありましたが、すぐ状況を判断し、普段の訓練のように素早く自分の身を守る行動がとれました。二つ目は、防災マップの作成です。私たちの地域にも防災マップはありますが、どの地域がどの避難場所であるのか、どこが危険か、一人ひとりが十分把握できているとは言えません。マップに自分の手で記入すれば、一人ひとりの理解が深まります。この防災マップは、地域の人の協力も不可欠で、今後の課題です。

私たちの住む地域にも、近年大きな地震が起きると予測されます。地震だけでなく、大雨や洪水などの被害も予想されます。災害発生時にも、正しい判断をして自分の命を守っていける活動を地域と連携し展開していき、「助けられる中学生から助ける中学生」を目指します。

私たちの未来を明るくする

大垣市立北中学校三年
橋本 玲

私は、三日間の被災地の訪問で、被災した中学生から話を聞くだけでなく、大きな被害を受けた施設や学校を目の当たりにしました。東日本大震災が残した悲惨な爪痕は、見ないとわからないと強く感じました。「百聞は一見にしかず」とはこのことだと思いました。被災した方が涙ながらにお話しされる言葉には、無念さや、悔しさがひしひしと伝わってきました。実際に被災地を訪問するまでは、どこかに人ごととしかとらえていなかった私がありました。訪問して、少し時間がたちましたが、目の当たりにした被害の大きさと、被災された方々の深い悲しみは私の心にしっかりと焼き付いています。「助けてもらわなくちゃ何もできない、でもこのままでいいはずがない」「自分も何かしたい、しなくてはならない」と思うようになりました。

交流した矢本第二中学校は、あらゆる所に防災マップが掲示してあり、「忘れてはいけない」と思わせるようになっています。この掲示一つとっても災害への意識が高く、私たちとの災害への意識の差を痛感しました。矢本第二中学校には「語り部」の方がおられ、被災当時のことを聞かせていただきました。あまりにも悲惨な状況から「声が出なくなった」と言われた時、本当にそんなことってあるのだと思いました。自分には全く想像つかないことを、泣きながら話されました。お話をされるとき、被災したときの苦しみや、悲しみを思い出さずにはおられないのだと思いました。お話を聞き、私は、「災害をなめてはいけない、甘く考えていてはいけない」と痛切に思いました。しかし、私の周りの友達は訪問する前の私と同じような意識の人も多いのではないかと危機感をもちました。

そこで、私は、少しでもみんなの防災への意識3H「（HEAD：頭）防災の知識と意識（HEART：心）判断力と決断力、（HANDS：手）コミュニケーションやアクション」を高めたいと実行に移しました。矢本第二中学校で行われている防災訓練の一つとして事前に一切情報を知らせないで避難訓練をする「ショート避難訓練」を一緒に訪問した友達と学校に提案し、実際に行いました。最初は驚いている様子も見られましたが指示に従いすばやく行動できました。成果があった反面、反省点も見つかりました。実際に災害がおきた時、パニック

被災地から学ぶ

可児市立蘇南中学校二年
前期生徒会副会長　松下 萌唯

東日本大震災。あの大惨事から七年近くが経ちます。正直、私は以前より震災のことを考えなくなっていました。そんな時、被災地との交流事業の話がありました。私は、実際に被災地を訪れ、現状をこの目で確かめることで、「今の自分に何ができるのかを考えたい」と思いました。また、南海トラフ地震という大きな災害が、私の生きている間に起こる可能性が高いことから、その時の対処法も交流を通して学びたいと強く思いました。そんな思いから、私はこの交流事業に参加することを決めました。

東北は、大きな被害だったにも関わらず、町の復興作業はかなり進んでいました。正直、驚かされました。また、被災地の方々の「東北を何とかしたい」という強い思いも感じました。訪問した東松島市立矢本第二中学校と石巻市立牡鹿中学校では、中学生が地域の方々と命を守る訓練をしたり、防災マップを作成したりしていました。震災の記憶を次の世代へ繋ぎ、二度とあのような被害を繰り返さないという思いが伝わってきました。特に私が心に残ったことは、中学生による「地域の方々への恩返し」の活動です。矢本第二中学校では、ごみ拾いや地域行事の運営に参加する取組。牡鹿中学校では、地域の方を元気づける、全校生徒によ

る侍ソーランの取組。侍ソーランを実際に観させてもらって、とても迫力があり、観ている人に勇気を与える踊りだと感じました。両校の発表から、中学生の願いのこもった取組が地域の貢献に繋がっているのだと思いました。

しかし、体験中、復興とは真逆のものと出会いました。それは石巻市内にある大川小学校です。児童のほとんどを、津波で亡くしてしまった場所です。妙に静かで、胸がしめつけられる思いでした。ここは、津波の恐ろしさを忘れないために、あえて残してあるそうです。改めて震災の悲惨さを感じると共に、「命を守る」ことについて考えさせられました。

私は体験したことを基に、蘇南中学校の全校生徒に「いかに大規模な地震・津波であったか」「震災から命を守るには、日頃から災害を想定し、真剣に考えなければならないこと」「人の命の尊さ」「震災、悲しみを乗り越えて、今、必死に生きている東北の方々の姿や心」を伝えました。私自身も、体験したことを発信していくだけでなく、地域の行事などに積極的に参加し、たくさんの人たちと繋がりをつくっていけるようにします。そして、地域の方々に頼られるリーダーになりたいと思います。

被災地に学ぶ中学生交流活動に参加して

中津川市立付知中学校三年
生徒会執行委員　早川 萌詩

私は、今回の交流事業で初めて被災地を訪れました。最初に抱いた印象は、新しい家が多くてきらきらしていることでした。しかし、これらの家が建てられる前は、瓦礫の山だったことを聞き、自分勝手な感想を持ってしまったと情けない気持ちになりました。

今回の交流活動では、被災された方々から被災した当時のことや防災への意識や行動、震災当時のことについてお話を聞きました。私は岐阜に帰ってきて、現地で見たもの聞いたことを少しでも他の人に知ってほしいと思い、全校の前で報告しました。『今、私たちにできること』というテーマで、「震災が起こったことを分かったつもりになるのではなく正しい事実を知ること」「防災訓練に真剣に取り組むこと」について特にこだわって話しました。

ある語り部さんのお話です。地震直後、子どもたちを助けに行くか、母親を助けに行くか迷ったそうです。子どもたちを助けに行きました。子どもたちを高台まで避難させ一旦、落ち着きました。当日は雪が降ってとても寒かったので毛布を取りに家に戻りました。その途中、海の異変に気付き高台よりも一段高い山に登ることにしました。結果、子どもたちは無事でした。高台まで津波が来ていたそうです。しかし、次の日、母親と祖母が亡くなったことを知りました。とても生活なんてまともにできるはずもなく、信じられなかったそうです。私は自分の大切な人との別れがこんな風になったら耐えきれないと思いました。だから、命を守るための相談をすることを教わりました。いつ、どこで、どんな状況でどうするのか、細かいシチュエーションまで想定してほしいといわれました。私はこの話を聞いて、命の価値観とか突然の出来事への対処とかへの感覚がらりと変わりました。

宮城県の矢本第二中学校では、生徒会を中心とした活動が多く行われていました。「3H」という防災テーマのもと生徒がカレンダーや防災だよりを自分たちで作っていました。また、生徒会が企画をして、生徒に知らせないショート避難訓練や地域の人たちに協力してもらい避難所設営まで行う訓練などもしていました。私たちもいつ起こるか分からない災害に備えるために防災訓練に真剣に取り組むことが大切であると感じました。

被災地では、今でも復興作業が行われていました。同じ間違いを繰り返さないためにあの日起こったことを忘れないように前に進んでいる人、前向きに頑張っている人がたくさんいました。その人たちのためにも、今、できることを考え続けていくことが大切だと思いました。

動き出した心の時計

本巣市立根尾中学校二年
文化委員　林 空良

「私の心の中の時計は、あのときから止まったままなんです」

テレビの中の女性の言葉を胸に参加した研修。きれいな建物や緑もたくさんになり、街はずいぶん復興しているだろう。そう思っていた僕の目は、石巻の電車の中で大きく見開いた。そこには、更地となった土地とたくさんの重機だけがあり、復興とは程遠い現実があった。更地でない場所にも、心がギュッと締め付けられる場所があった。たくさんのロープが張られた石巻市立大川小学校だ。悲しい思い出が蘇ってくるから壊してほしい、後世に伝えるために残してほしい、そんな気持ちで保護者の意見が分かれ、話し合いの末、残すことになった学校だ。たくさんの心のかっ藤の中残してもらえた建物のお陰で、僕たちは学び、感じることができる。建物と共に被災者の願いや思いがそこにある事を、僕たちは忘れてはいけないと感じた。

一日目の矢本第二中学校では、当時の様子や非常用具の確認と共に、防災マップ作成・お祭りの準備・ボランティアに日常から関わるコミュニケーション力・アクション力を学んだ。僕がジュニアリーダーで行なっているボランティア活動も、防災に繋がっているんだと感じた。地域や人との関わりは、心だけでなく、命もつなぐ。そう感じた。

その教えから、僕はこの夏、市

の神輿ボランティアや本巣市総合防災訓練に参加してみた。参加した際、「こういう場に来る事はええ心がけやぞ」と、消防士の方が声をかけて下さった。いつもは地区の防災訓練だけで終わっていた僕。今後はこのアクションに加え、友人も誘い、良い意味でみんなを巻き込んでいきたい。こう思えたのは、自助・公助・共助を教えてくれた、東北での学びがあったからだ。

僕たち根尾中学校の二人は、牡鹿中学校訪問時、オカリナで復興ソング「花は咲く」を演奏した。それは、元気になってほしいという願いからだったが、その願いは、被災した牡鹿中の生徒も強くもっていた。どういう事かというと、笑顔創造プロジェクト！ソーランを踊ってみんなの心を笑顔にしたい！と、笑顔で踊る姿を見せてくれたのだ。被災時、たくさんの人たちが救いの手を差し延べてくれた。だから今度は、中学生の自分達だからできる事を頑張りたい。熊本地震の地へも目を向け、今度は自分達の番だ！と、支援のアクションを起こしたそうだ。僕からの「止まったままの心の時計は動き出しましたか？」の問いにも「気持ちを切り替えて前に進んでいます。」の答えが返ってきた。復興は、確かにまだまだ時間がかかる。けれど、東北の心の中の時計は、未来に向かって進んでいた。

帰宅した日、東北からの希望の向日葵の花が庭で大きく咲いていた。この向日葵のように、僕も笑顔でこの学びを発信していきたい。

明るい東北へ

本巣市立根尾中学校二年
学習委員長　大堀 みつき

私は、明るい東北を見にこの研修に行きました。実際に東北を訪れ、今の明るい東北を知ると共に、苦しかったり、泣きたくなったりする話もたくさん伺いました。特にお伝えしたいものを書きます。

牡鹿中学校で、同世代の中学生と話すことが出来ました。「ライフラインが整っていない避難場所で過ごしていた。両親と三日会えずふたをしてしまってあるの。ずっと引きずってるわけにもいかんでしょ。だから大丈夫。」とおっしゃっていました。

東北には、笑顔と楽しい人たちと豊かな自然とおいしいものがたくさんありました。しかし、町のいたるところに、いれい碑や、壊れた小学校など、震災の爪跡がありました。人々の心にも、当時の様子や思いは鮮明に残っていて、私がお会いした方々は、「他の地域にこの経験を活かしてほしい。」とさみしかった。でも、近くの大人が、『大丈夫』って言ってずっとそばに居てくれた」そう話す中学生はすごく笑顔が素敵でした。そんな笑顔からは想像できないほど、幼稚園ぐらいの時の震災のつらい記憶は彼女の中にはっきりと残っていました。そして、当時、助けてもらった方や、被災した地域のために、ボランティア活動を行うなどして、自分にできることで恩返ししていました。

ホテルでお会いした地元の漁師さんも、みなさん明るくて、笑顔が素敵な方々でした。当時の様子を目の前で詳しく話してくださった語り部さんも、笑っていました。お母さんが亡くなった時のこと、子どもを迎えに行った時のこと、だんなさんと無事会えた時のこと、会社の社長さんに「逃げなさい。」と、強く言われた時のこと、聞いていると涙が止まりませんでした。お話の後、質問の時間があったのですが、その前に語り部さんが、「みんな遠慮しなくていいよ。なんでも聞いて。おばちゃんね、あの時の気持ちは、思い出の中にいつもふたをしてしまってあるの。ずっと引きずってるわけにもいかんでしょ。だから大丈夫。」とおっしゃっていました。

か、「もう二度と、家族を失いたくない。」という強い思いで、日々、生きていました。

当たり前の日常は、いつ壊れてもおかしくない。だからこそ、私たちは、訓練とか準備とか、東北に学んでいかないといけないのではないでしょうか。また、伝えてもらったことや、覚えていることを忘れないで、未来に語り継がないといけないと思うのです。前を向く気持ちを。

被災地交流から学んだこと

岐阜市立東長良中学校二年
議員　内田 愛華

「ハンドルを右に切ると子どもたちがいる学校がある。左に切ると母がいる実家とおばあちゃんがいる病院がある。私は交差点で迷った後、ハンドルを右に切りました。」

東日本大震災で津波の被害にあった語り部さんの話だ。この後、車は流され子どもたちは必死で高台に逃れ助かったが、おばあちゃんたちは助からなかったそうだ。でも、なぜ私たちに語ってくださったのだろう。

私は八月に宮城県へ行き、東日本大震災や防災について学んだ。一日目は東松島市立矢本第二中学校の生徒会の皆さんと交流し、震災後の避難所の様子を聞いた。震災後二日間は食事がなく三日目の朝に一家族に食パン一枚を、そして飲み水が足りないので霧吹きで口の中にシュッと、ほんの少しだけ水をもらったそうだ。病気の人はペットボトルのキャップ一杯だけ水を飲めたという。その状況の中で当時の中学生が教室の模造紙をはがして布団代わりにしたり、卒業式用の花和紙をトイレットペーパー代わりにしたりと工夫していたそうだ。命が助かった後も大変なことがたくさんあったと知り、改めて震災は怖いと思った。この中学校では「災害時にも活躍できる中学生」を目指し、臨機応変に対応する力をつけるために、二か月に一回、各委員会で企画したショート避難訓練を行っているそうだ。中学生なのに防災に対する意識がとても高いことに驚いた。

二日目の石巻市立牡鹿中学校では、生徒会を中心に「笑顔創造プロジェクト」という地域に貢献する活動を行っていた。笑顔の写真を載せたスマイルカレンダーの制作や、仮設住宅への訪問、地域の清掃、お祭りなどで披露する牡鹿復興太鼓や侍ソーランがあるそうだ。侍ソーランを披露してもらったが、おそろいの法被を着て踊る姿はとてもかっこよく力がわいてきた。その後、一緒に簡易テントや簡易トイレの組み立てをやってみた。初めてだったが、協力すれば簡単に組み立てられることがわかった。実際に被災地へ行き、いろいろな活動に参加してとてもよい経験となった。

帰ってきてから、岐阜市の防災について市役所の都市防災政策課で話を聞いた。それらをまとめ社会科課題追求学習作品展に発表した。また十一月に地域の防災訓練に初めて参加してみた。簡易リヤカーの組み立てや土のう作り、消火訓練などを行った。防災倉庫の中やマンホールトイレを見せてもらい参加してよかったと思った。大人だけでなくもっと中学生も地域の防災訓練に参加するとよいと思った。

最後に、語り部さんは「今日は皆さんに種を一つずつ渡したつもりです。いざという時に動けるよう、大切な人と命を守る相談をしてください。」と言われた。この思いをみんなに伝え、どうすればよいか一緒に考えていきたい。これからも地域の活動に参加したり、進んでボランティアをしたりして、今回の体験を活かしていきたいと思う。

＊本事業の実施にあたり、県ＰＴＡ連合会から次の五名が一行を引率しました。
二村　勝（会長）、粕谷幸司（副会長）、北川真理（母親委員）、川地ひろみ（母親委員）、水野良彦（事務局長）

家庭教育応援団！「わが家わが町家庭の日発表会」編

「わが家わが町家庭の日発表会」とは？

家庭は、ふれあいと安らぎの場であるとともに、基本的な生活習慣やマナーなど社会のルールを身につけるための重要な場です。また地域社会は、青少年の人格形成に大きな影響力をもっています。

「わが家わが町家庭の日発表会」（岐阜県、公益社団法人岐阜県青少年育成県民会議主催）は、毎年各地区持ち回りで開催され、家庭や地域の力を活かした青少年の健やかな育成を目的に、楽しく温かい家庭づくり、地域活動団体の進める地域づくり・人づくりの具体的な事例が発表されています。

今年度は十一月十二日(日)、飛騨市古川町公民館において開催され、飛騨地域の団体・家族による「家庭の日」の取組発表がありました。齋藤由宏さんご一家（飛騨市古川町在住）と宮前正樹さんご一家（飛騨市宮川町在住）は、家庭内の豊かなコミュニケーションのあり方をテーマに発表されました。

立ち見がでるほどの大盛況でした。(480名参加)

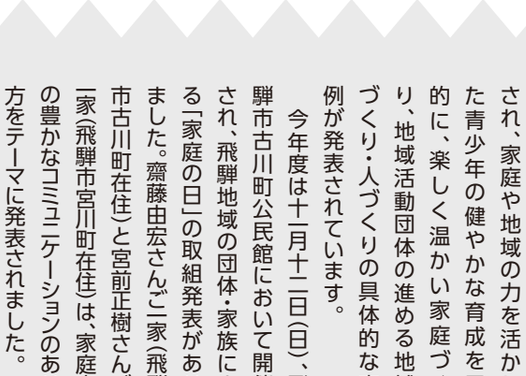
齋藤さんご一家（飛騨市古川町）

三世代同居の齋藤さんご一家。家庭教育を自然にサポートされる祖父母、仕事と子育てを両立しながら信念をもって子どもに向き合う両親のもと、中三と小六のお子さんたちが健やかに育っていることがとてもよく伝わる発表でした。

家庭内のコミュニケーションは、子ども中心の話題（部活やスポーツ少年団、学校行事、地域・家庭行事）で、なおかつ誰もが共感して聞くことを大切にしているそうです。

小六の優衣さんは「家族にはいつも応援してもらえてうれしいです。」と話しました。子どもたちの頑張りをしっかり認め、励ます齋藤家の大人の姿勢が、学校やスポーツ少年団で、ますます力を発揮しようという子どもたちのやる気に火をつけています。

また、祖父の健さんからは「家族が健康で過ごせるように心を配りながら、先祖代々守られてきたものを息子たちや孫に伝えています。」とお聞きしました。三世代がしっくりとかみ合い、家庭・地域行事を大切にしながら、健康的で活動的な子どもたちを育てている齋藤家。「家庭は豊かなコミュニケーションで作られます。」と結んだ由宏さんの言葉が印象的でした。



宮前さんご一家（飛騨市宮川町）

宮前さんご一家は昨年から「話そう！語ろう！わが家の約束」運動に取り組まれています。（小一の天寧さんの保育園の時の取組は今年度の県作成の家庭教育啓発チラシに掲載されています。）

小五の心寧さんの約束は「手伝いを毎日二つはする」、天寧さんの約束は「べんきょうがおわってからおかあさんのてつだいをする」で、これらは家族で話し合い、決めたそうです。

心寧さんによると「約束が守れない日もある」そうです。それでも取組が継続する理由をお母さんの正美さんにお聞きしたところ、「守れなくても子どもを責めない」「親子で」一緒に楽しく取り組む」「事実をもとにほめる」「感謝の気持ちを伝える」などが見えてきました。

「約束だからやって当たり前」ではなく、お子さんたちをやる気にさせる声かけをすることで、子どもたち二人ともがほめられ、認められて安定した気持ちで毎日を過ごしていることがわかりました。そして、夫婦の間でも「ありがとう」「助かった」といったプラスの言葉かけが多いという宮前家。かけ合う言葉によって醸し出される家庭内の温かい雰囲気が会場の皆さんにも伝わるようでした。

二家族の発表を通して

齋藤さんご一家、宮前さんご一家は環境や毎日の出来事が違っても、「家族だから言わなくてもわかり合える」と安心することなく、「家族だからこそ言葉にして分かり合う」ことを大切にしていらっしゃることが共通点であると感じました。

県内の全ての家庭において、二家族のようにポジティブな言葉をかけあって、家庭内のコミュニケーションがますます豊かになりますように、そんな中で子どもたちが健やかに育ちますように、そう願わずにはいられない温かいご家族の発表でした。ありがとうございました。

今年度も「家庭教育応援団」シリーズをご覧いただき、ありがとうございました。

今年度も県内多くの園・学校・市町村・企業等において、充実した家庭教育学級が開催されました。快く取材に応じていただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

来年度も保護者の学びが深まり、その学びが家庭や子どもたちに還元できるよう一層力を尽くして参ります。

どうぞよろしくお願いいたします。

県のホームページでは家庭教育に関わる情報を発信中！ぜひご覧ください!!

岐阜県　家庭教育学級　検索

お気軽にご相談ください!

家庭教育学級や企業内家庭教育研修等、内容から講師選定までご相談に応じます。

環境生活政策課	☎058-272-8752（直通）
西濃県事務所	☎0584-73-1111（内線219）
中濃県事務所	☎0575-33-4011（内線210）
可茂県事務所	☎0574-25-3111（内線208）
恵那県事務所	☎0573-26-1111（内線208）
飛騨県事務所	☎0577-33-1111（内線206）

仲間と楽しく多様性を学びあうグループワークの実践

岐阜聖徳学園大学教育学部　安田 和夫

「企業内家庭教育研修」の取組

岐阜県の特色ある取組の一つに、「企業内家庭教育研修」の取組があります。

様々な家庭環境の変化や、共稼ぎ夫婦の増加などにより、家庭教育学級をはじめとするＰＴＡの様々な活動に参加しづらい状況が広がっています。子育てへの不安や悩みを共有したり、子育ての研修を受けたりしたくても、その機会が限られているのが実状です。

そこで、県内企業と連携して、岐阜県が講師を派遣する形で、一時間ほどの出前講座「企業内家庭教育研修」を実施しています。

私も、教育委員会に在職していた頃から、何社か訪問させていただいています。不思議なことに、印刷関係の会社にご縁をいただくことが多いのです。この「わが子のあゆみ」を印刷製本している大垣市に本社を置く「サンメッセ株式会社」を訪問させていただいた時は、夕刻、皆さん、お疲れのところだったと思いますが、多くの方々にご参加いただき、グループワークを通して、コミュニケーションの楽しさと難しさを体験していただきました。

研修実施後に、人事担当者の方からは、ぜひ、こうした研修は新任社員研修に取り入れていきたいとの感想をいただきました。様々な違いのある方たちが、互いを理解し合い、尊重し合い、一つの課題を解決していくことは、家庭だけでなく、企業でも求められていることなのでしょう。

「コミュニケーション」で、つなぐ・広がる・共感する！

また、同じく、印刷業で、毎年のように、私を指名してお招きいただいている会社があります。岐阜市にある「ヨツハシ株式会社」です。従業員の方々とも顔なじみになりつつあり、毎回、熱烈な歓迎をいただいています。ここでも、グループやペアでコミュニケーションをとりつつ、様々な課題を解き明かす一時間ほどのプログラムです。

毎年のようにあるので、「今年は何をやろうかな」と内容を考えるのも大変です。研修日前日までああれこれ考えて臨みます。結構、これが楽しいのです。一〇〇均ショップやホームセンターに何度も足を運び、アイディアを膨らませます。

「ヨツハシクイズ」にはじまり、「ロープマジックに挑戦」「重さをピタリ当てましょう」「お弁当の中身を絵で伝えましょう」等々、毎回、新作、創作のグループワークを持参しての訪問です。

今年度の「ヨツハシ」のみなさんの感想（一部）です。

・毎回、笑いが絶えない！
・毎回楽しい時間が過ごせてとても幸せ。和気あいあいとできた。
・家庭・職場でのコミュニケーションの大切さを知った。
・人にものを伝える大切さと難しさがよく分かった。
・普段「伝わっているかなー」と思っていることも言葉にすることは大切だと思った。
・他部署の方、社内でも話す機会のない方とコミュニケーションをとり社内の輪が広がった。
・これを家庭にも広げられそうだ。来年もぜひ受けたい。

このように、一時間ほどの短い活動ですが、本当に多くのことを感じ取っていただいています。参加される方は、社長さんを筆頭にして、老若男女問わず、全部署から、ほぼ全社員です。今年度から、社長さんの配慮で、以前から要望のあったパートさんの参加も可能になりました。おかげで、会場は満員御礼。笑顔、笑顔の一時間です。

また、感想の中には、「人が生きていく上で大事なテーマだ」「自分の思いと相手が思っていることが違うことがわかった」「他者を受け入れることも必要だ」という多様性尊重に関わる内容が数多くありました。人と関わり、互いを受け入れていくことが必要なグループワークは、コミュニケーション力の向上だけでなく、多様性尊重の教育そのものだったのです。

多様性を学ぶことの大切さ

先日、ある会で、ＬＧＢＴのことを小学校時代から正しく教えていくことの重要性を訴える青年教師に出会いました。現在、専門家や関係機関の力を借りつつ、授業モデル案の作成中で、検証作業を繰り返しているとのことです。私は、この青年教師の志の高さに感銘を受けました。

「多様性を認め、互いを尊重しよう」「あらゆる差別を解消しよう」ということは、総論賛成で、その理念に反対する人は少ないことでしょう。しかし、いざ、自分の家族、友人、地域の人々と、自分との関わりが現実のものとなると途端に、各論反対で「それは困る」「負担が大きすぎる」と、議論が進展しないばかりか、時に、排除の論理に支配されてしまいます。

「このままでいいのだろうか」「苦しんでいる人が、実際にいるのに見て見ぬふりをしていいのだろうか」「教育者としてできることは何だろう」…きっと彼は、自分に問い続けているのでしょう。

多様性を受け入れ、互いを尊重し合うということは、「人が生きていく上で大事なテーマ」であり、かつ、簡単には解決できない「永遠のテーマ」なのかもしれません。

家庭で、地域で、企業で、そして、学校で、様々な機会をとらえ、「多様性」や「共生社会」をテーマに、議論を深め、学び続けることが重要であると思います。

多様性を尊重することは、決して特別なことではありません。自分と他者の違いだけでなく、まずは、自分の中にある多様性に気づき、自分の弱さや脆さ、他者との違いを素直に受け入れていくことから始まるのではないかと思います。そして、同時に、自分の個性や長所の存在に気づき、かけがえのない「自分」に優しくなれるところから、他者との共生共存が始まるように思います。

有名な金子みすゞの「わたしと小鳥とすずと」の詩にある「みんなちがって、みんないい」は、まさに、そんな「自分」に優しくなれるメッセージだと感じています。

連載⑤ PTAのABC

PTAの生い立ち⑤

岐阜県におけるPTA活動の展開

県の目標

昭和三十年代半ば以降、経済発展と生活環境の急速な変化により、また就学児童・生徒の増加に伴い、学校だけでなく家庭や地域における教育のあり方がこれまで以上に問われることとなった。PTAの役割が再認識されたゆえんである。そうした認識に立って、県当局はこれまでに定着した県内各学校のPTAの活動内容の充実をはかる意図のもとで次のような基本目標を設定した（「岐阜県の教育」昭和三十五年度版）。

＊PTAの研修の機会を多くする
○会の目的を明確にし、会員の自覚を高める
○事業が団体目的から逸脱しないように留意する
○父親学級の解説を奨励し、学級開設のプログラムを研究する
＊家庭教育の振興を図る
○世代の相違からおこる家族間の意思不通を調整するため家族の話し合いを奨励する
○学校教育と家庭教育を不離一体にするため連絡会と研修会を行う
○機関誌の内容充実と編集技術の研究をすすめる
＊実践活動を盛んにして地域環境の教育的浄化につとめる
○子ども会、親子会、一日入学者の実践活動を奨励する
○青少年の不良化防止のため、悪い環境を排除する世論を高め、関係方面とも連絡して実践活動を盛んにする

右に示された研修、家庭教育、地域環境の整備の三つの柱は基本的にはその後のPTAに対する県の指導・支援目標として継承されていく。

しかし、学校や家庭の教育をめぐる状況の変化に対応して、時代とともにPTAの目標や課題も漸時新しい強調点が付け加えられた。

すなわち、三十六年度には新会員や役員幹部の研修の強化、青少年育成保護条例の普及徹底、三十八年度には子どもの教育についての研究の深化、四十二年度にはP（父母）とT（教員）の協力強化、子ども会の育成と指導の充実等が強調されている（「岐阜県の教育」昭和三十六・三十八・四十二年度版）。

その背景には、青少年問題の多発化に対応し、校外指導の必要性が高まりつつあったこと、さらにそのため、子ども会の活性化を含めた地域での子どもの斯道のあり方が重要な課題となっていたことなどが挙げられる。

県PTA連合会の活動

県内の小・中学校の単位PTAのゆるやかな連絡組織として、岐阜県PTA連合会（以下「県P連」という）が果たした役割は大きい。県P連の主要な活動は、以下のようである（「岐阜県のPTA三十年の歩み」県PTA連合会昭和五十四年）。

三十五年度の第十三回全県大会では、大会の目標を「道徳教育の在り方、進め方についての研究」とし、パネル討論「道徳教育における家庭と学校との関連について」などを開催した。

翌年度の第十四回全県大会は「青少年の健全なる育成補導は如何にあるべきか」を主題とし、「青少年の健全なる育成についてPTAの果たす役割と活動」について全体討議を行っている。この年は青少年不良化防止運動に参加する一方、重要課題として高校生急増対策問題や学校給食問題に取組んでいる。

三十七年度は、県P連の活動方針を、①成人教育活動の振興、②児童、生徒、青少年の愛護活動を推進する、③中学校教育の正常なる発展に協力する、④広報活動の推進、⑤組織の強化と運営の充実、⑥教育財政の確保に努力し、義務教育の進展をはかる、と設定し、第十五回全県大会では「高校生急増対策について」をテーマに研究討議している。

三十八年度の第十六回全県大会では「新しい時代にふさわしい家庭教育の在り方」を研究討議し、「明るくたくましい子どもの育成について生き方、愛し方、導き方」を検討し、次の「宣言」を採択している。

『わたくしたちは、県下各地域で研究した結果をもちより、ここに第十六回岐阜県PTA全県大会を開催し、研究討議の結果、人づくりの基盤は家庭教育の振興にあるとの信念をいよいよ固め、よりよい父母、教師となるため、自らをみがき、あらゆる障害を克服し、総力を結集して目的達成のため、全力を尽くすことを決意するものである。』

四十二年度には、活動目標を「PTAの規約を再確認し、批判される運営と活動を反省し、PTAの近代化を考えよう」と定め、次の三点の達成をめざした。

一、積極的に後援団体より学習するPTAに切りかえよう
○魅力あるPTA学級の解説
○義務教育費負担軽減運動の展開
二、教育の正常化を推進しよう
三、青少年の健全育成に役立とう
○成人自らの生活姿勢の確立

前述の目標をめざして第二十回県P研究大会では、「PTAの体質改善と教育の正常化をめざして」全体討議が行われている。

さらに四十三年度には、活動目標を「正常な力強いPTAにするために父母と教師が協力しあおう」とし、次のような具体的課題を指示した。

一、公費負担の現状を分析し、年次的廃止計画を樹立し、望ましいPTA活動に切りかえよう
二、地域での子どもの生活を指導するPTA活動を推進しよう
三、明るく楽しい家庭づくりに努力しよう
四、公費教育予算を充実確保する運動を展開しよう
五、へき地教育の振興に努力しよう

この年の県P研究大会では、右の目標をめざして「子どもの生活指導はどのように進めたらよいか」について研究討議が行われた。右にみるように、「教育の正常化」「正常な力強いPTA」という文言が注目される。

四十二・四十三両年度においては、県教育委員会による教育正常化政策が実施された。岐阜県教職員組合を中心とする、いわゆる教育民主化運動（教職員の勤務評定、全国一斉学力調査への批判・反対運動）への県当局による対抗・抑制的な方策がとられていたことが、このPTA活動の目標や方針に反映していたといえよう。

PTAも、こうした県の製作に協力する組織として活動することが期待され、必要視されていたことがうかがえる。（編集部註：「岐阜県教育史　通史編各論一（社会教育）」より転載）

機関誌「PTA教室」「わが子の歩み」の創刊

県PTA連合会が発足して二年目の昭和二十五年一月、機関誌「PTA教室」が創刊された。しかし発行は安定せず、翌二十六年十一月「わが子の歩み」と改題して再スタートした。当初は県教育委員会、県校長会の主導によるものであったが、家庭教育と成人教育の充実を図り、地域の教育熱を高めて学校教育理解に大きな役割を果たしてきた。

発行は月刊から隔月刊、年五回発行（現行）と変遷し、平成十三年には創刊五十周年を迎えて記念特別号を発行、十六年度から「わが子のあゆみ」としてカラー頁を拡大し、今日に到っている。

機関紙「岐阜県PTA」新聞の発行

昭和五十三年三月一日、機関紙「岐阜県PTA」が隔月刊の広報紙として全家庭に無料配布された。経費は広告掲載で賄われ、民間の総合企画社（名古屋市）によって翌五十四年からは月刊となり、紙面の一部を岐阜・西濃・中濃・東濃・飛騨の五地区に分けた地区版を掲載した。毎月発行されるPTA新聞によって情報伝達機能が上達し、「わが子の歩み」は読み物として住み分けができることとなった。

平成八年度からは、地区版を廃止して県内全ての会員が同じ内容の情報が得られるよう改革された。但し、広告掲載の便宜上、地区版の名称は残された。平成二十年度から、印刷・広告業務を県内の業者に依託した。

全国大会の開催

昭和六十三年八月二十五日・二十六日の二日間、第三十六回日本PTA全国研究大会が岐阜市を中心に大垣市・各務原市・関市を会場に十一の分科会で開催された。大会テーマ「未来へはばたく心豊かなたくましい子どもを育てよう」のもとに全国から八〇〇〇名が参加し、二日目の全体会は岐阜県民体育館で行われた。

この年は岐阜市制一〇〇年にあたり、中部未来博覧会の開催中とあって、バブル景気にも乗って大いに盛り上がりを見せた。

「会員の皆さんへお願い」

平成四年九月号「岐阜県PTA」新聞に、県PTA連合会大雅清光会長による次の記事が掲載された。

「七月十九、二十日の新聞報道などで問題となった昭和六十三年当時の「裏口座」の件によって、PTA活動に多大の影響を与えたことは、誠に残念なことであり、会員の皆さんに申し訳もないことであります。

この件につきましては、現在、実態調査が慎重に行われていますので、事実関係が明確になりましたら、報告する予定にしています。複雑な問題ですので、すぐ解決することは、困難かと思いますが、ご了承くださるようお願いします。

今、県PTA連合会は、人心を一新して、着実に歩んでおります。今後も、私たちに課せられた、さまざまな諸問題を皆さんとの連携によって、真剣に取り組んでいく所存であります。

そして、県下最大の社会教育団体の名誉と責務を果たし、名誉ばん回をしたいと考えています。

そのためには、会員の皆さんのご理解とご協力を、今まで以上にお願いしなければなりません。どうかよろしくお願いします。」

県PTA連合会創立五十周年

平成十年、県PTA連合会は創立五十周年を迎え、記念大会を開催した。記念誌の発行と同時に見舞金給付会の発足と二十四時間保険を任意制度に切り替えた。また書き損じハガキ等の収集による基金活動を県PTA基金として再スタートした。当時の田中康司県PTA会長は、後年この年を「区切りの年」として次のように語っている。

「平成十年度は岐阜県PTA連合会の混乱に終止符を打った年でした。平成四年七月に岐阜県PTA連合会に裏口座があるとの新聞記事により、岐阜県PTA連合会の品位と品格に疑問がもたれていた時期でした。後年になって行政の体質がもちこまれたことによる問題もあったことが分かりましたが、その当時はPTA役員の資質だけを問題にされていました。後任の連合会長を、その当時一緒に活動していただいた水野会長や梅田会長がやってくださったことで、岐阜県PTA連合会の安定につながったと感謝しております。」（岐阜県PTA連合会創立六十周年記念誌「信新心」より）

＊連載「PTAのABC～PTAの生い立ち」は今回で終了し、新年度からは「PTA役員の選び方」としてスタートします。　編集部

私が出会った1冊の本【続35】

コーヒーが冷めないうちに

川口 俊和 著
サンマーク出版

美濃加茂市立加茂野小学校PTA会長
田辺 明弘

「お父さん。この本、おもしろいよ。」

この本との出会いは、小学校六年生の娘の紹介。この作品、とっても感動して面白いよと勧められたことからでした。普段、あまり本を読む習慣のない私には、読み応えがありました。

物語の舞台は、とある街の、とある喫茶店の、とある座席に不思議な都市伝説があり、そこに座ると座席に座っている間だけ望んだ通りの時代に移動できるという物語です。喫茶店の名前はフニクリフニクラ。

しかし、そこにはルールが五つありました。

一、過去に戻っても、この喫茶店を訪れたことのない者には会うことができない。

二、過去に戻ってどんな努力をしても現実は変わらない。

三、過去に戻れる席には先客がいる。席に座れるのはその先客が席を立った時だけ。

四、過去に戻っても席を立って移動することはできない。

五、過去に戻れるのは、コーヒーをカップに注いでから、そのコーヒーが冷めてしまうまでの間だけ。

皆さんは、「あの日」に戻れたら誰に会いますか?そんな喫茶店で起こる心温まる四つのエピソード。私は、その中で結婚を考えていた彼氏と別れた女性の物語が印象的でした。

交際三年目の彼氏に大事な話があると喫茶店に呼び出され、突然仕事でアメリカにいくことを聞かされた上に、その出発が数時間後と言われました。そして、彼女は納得がいかないまま別れてしまいました。

もしそんなこと急に言われてもビックリしてしまい、意味が分からない状態になり、誰しも話はできなくなると思います。

言いたいことが言えず、また聞きたいことも聞けず…。彼女は後悔しか残りませんでした。

そんな思いの中で生活している時に過去に戻れるという喫茶店の噂を聞いた彼女は、心の整理をするためにフニクリフニクラに行きました。そこで噂の席に座り、コーヒーカップに温かいコーヒーを注いでもらいました。そして、あの日に戻り、あの時言いたかったこと、聞きたかったことの話をします。

読み終えた後、私は、自分の過去にあった出来事を振り返りました。あの時こうしていればとか、あの時なぜこういう風に言わなかったのだろうと。

考えることで自分自身を見つめなおすことができます。そして、今後はどのようにしていこうか考えを改めることができます。その為には、素直な心が大切であることに気づきます。普段の生活でも意地を張ってしまうことや、強がってしまうことがよくあります。でも、この本を読むと相手に対する思いやりの大切さ、そして、相手の立場に立って改めて考えてみる「気づき」の大切さを感じます。

この本は、毎日の忙しい生活の中で心を落ち着かせてくれる一冊だと思います。子どもから大人までとても読みやすい、そして、感動の物語です。

もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら

岩崎 夏海 著
ダイヤモンド社

山県市立高富中学校PTA会長
玉井 薫

数年前にドラッカーのブームがあった頃、私もドラッカーの『マネジメント』に興味をもっていました。同じ時期にこの本がベストセラーになっていて、映画化等が決定していました。わが子も映画に出演する前田敦子さんのファンで、映画の原作が気になっていたこともあり購入しました。

企業のマネジメントを野球のマネジメントに活用していく内容を読んだ時に、仕事でお世話になった職人さんに言われたことを思い出しました。言われた内容は、「基本を身に付ければ、あとはそれを応用する。」です。本のなかで主人公は、見事にドラッカーの『マネジメント』を応用していると感じました。

私も自身の仕事から、何かわが子の教育に応用できないか考えたことがあり、「定量生産」を応用して学習計画を立てさせるようにしました。夏休みの宿題を例に挙げると、最初にすべての宿題の数を洗い出し、宿題をする日数で割るのです。そうすることで、その日に何をどれだけすれば良いのかが明確になり、さらに一日あたりの宿題の量が少なくなる感覚から負担感が減り、毎年計画通りに宿題をやりきることができています。

タイトルにあるように、主人公があたり、何をどうすれば野球部をするにが野球部のマネージャー甲子園に連れて行くことができるか、ドラッカーの『マネジメント』を活用していく内容です。最終的に、野球部は甲子園にいくことになるのですが、実際には、現実的な内容ではないところもあるので、野球経験者が読むと微妙かもしれません。

この本がお勧めだと思ったのは、ドラッカーの『マネジメント』を女子マネージャーの言動を通して、解りやすくしてあるところです。企業を野球部に置き換え、マネージャーに必要な資質は、真摯さと何が正しいかだけを考え誰が正しいかを考えないこと。事業には、顧客と市場の点から定義すること。企業には、マーケティングとイノベーションが必要であること等の説明が丁寧に構成されています。

この本を読んだ後に、ドラッカーの『マネジメント』を読みましたが、もしこの本を読んでいなかったら、内容をほとんど理解できなかったと思うほどです。仕事等でマネジメントを勉強したい方や興味のある方は、入門編としてお勧めしたいです。本との出会いのところでも書きましたが、映画やアニメにもなっていますので、文章から入るのも良いかと思います。

school infirmary

保健室ノート

●土岐市立泉中学校　養護教諭
水野 洋子

スマイルライフ生活習慣チェック

よりよい生活習慣をつくり、自分の能力向上をめざそう！

泉中学校は、泉小学校と泉西小学校の二校から進学してくる、全校で五〇〇名（十七クラス）の、土岐市北部の住宅地にある学校です。学校教育目標「創造・自主・協同」に向けて、活発な生徒会活動、バズ学習を活用した生徒の主体的な授業創造発表に取り組んでいます。

今回は、学校と母親委員会が連携して取り組んでいる、生活習慣に関する活動を紹介します。

学校での取り組み

土岐市養護教諭部会では、全国学力・学習状況調査の土岐市全体の結果から、「朝食の摂取」・「テレビ、ゲーム、携帯電話などのメディア時間」、「規則正しい睡眠」は正答率と関係があると分析しました。その結果を利用して、各学校で生活習慣指導をしています。

泉中学校では、全国学力・学習状況調査の分析結果に加え、朝食が大切な理由や、携帯電話・スマートフォンなど長時間のメディア使用が身体に与える影響、質の良い睡眠などについて指導した後に、「スマイルライフ生活習慣チェック」を実施しています。「スマイルライフ生活習慣チェック」では、平日の朝食・睡眠・テレビ・ゲーム・メール・インターネット・学習時間について調査表にチェックして、自分の生活を点数化し、レーダーチャートにすることで自分の生活を振り返り、生活改善をするにはどうするか考える取り組みをしています。

どの学年にも、生活習慣には大きな個人差があり、理想的な生活の生徒と、朝食を日常的に食べない、ゲーム、携帯電話・スマートフォンの長時間使用により睡眠時間や学習時間が少ない生徒がいます。

そこで、三者懇談や進路指導の場で、日常の積み重ねが自分の進路に大きく影響することや、将来の夢の実現に向けてどんな生活で過ごせば良いか考える指導をしています。

母親委員会での取り組み

母親委員会では、「スマイルライフ生活習慣チェック」とは別に、泉中学校区の三校で、中学校の中間テスト期間に合わせて、生活チェックを実施しています。中学校では中間テストの計画表に学習時間とネット使用時間の記入欄を設け、小学校では「話そう！語ろう！わが家の約束」実践カードを活用して、親子で「わが家の約束宣言」を決めて、学習時間・テレビ・ゲーム・スマホ時間について取り組んでいます。中学生と小学生のいる家庭では、家族みんなで約束を決めて取り組んでいます。

保護者の方からは、「このキャンペーンを行うことで自分から心がけることができ、約束もきちんと守れたので、これからも続けたいです。」「普段よりもネット時間が減り、勉強をする姿が多く見られたので良かったです。」「スマホを買うときの約束の一つとして、テスト前には制限をすることにしていたので、しっかり守れていました。」などの感想がありました。

最後に

保健室では体調不良を訴えて来室する生徒に、毎回、前日の暮らし・就寝時間・朝食の状況について聞いています。多くの生徒が、十二時過ぎに寝ていて、遅くなった理由は、勉強よりもゲームをしていたり、テレビ・動画を見ていたり、携帯電話・スマートフォン利用により、ついつい流されてしまうので、家族で取り組むことがよりよい生活の定着に繋がると思います。ぜひ、親子で話し合い、家族みんなで健康的な生活習慣をつくりましょう。

スマイル ライフ ☺☺☺ 生活習慣チェック

～よりよい生活習慣をつくり、自分の能力向上をめざそう！～

＊該当する項目に○をつけましょう。下のグラフにそれぞれの点数を記し、線で結びましょう。

年　組　番　氏名　　29年11月実施

		1点	2点	3点	4点	5点
1	1週間のうちで、朝食を食べる回数は	食べない	1～2日食べる	3～4日食べる	5～6日食べる	必ず毎日食べる
2	睡眠時間はどれだけですか？	4時間以内	5時間前後	6時間前後	7時間前後	8時間以上
3	テレビを見る時間はどれだけですか？(平日)	4時間以上	3時間前後	2時間前後	1時間前後	ほとんど見ない
4	ゲーム・ネットをする時間はどれだけですか？(平日)	4時間以上	3時間前後	2時間前後	1時間前後	まったくしない、もしくは30分以内程度
5	ライン・メールをする時間はどれだけですか？(平日)	4時間以上	3時間前後	2時間前後	1時間前後	まったくしない、もしくは30分以内程度
6	家庭での学習時間はどれだけですか？(塾・宿題をふくむ)	30分以内	30分～1時間	1時間～1時間半	1時間半～2時間	2時間以上

あなたのスマイルライフ合計点数は　（　　）点

生活チェックを終えて、今後どうするとよいと思いますか

最近、家庭や学校の生活で困っていることがあれば、書いてください。

スマイルライフ㉚得点分析

全校生徒　スマイルライフの集計結果　平成29年11月

1週間で朝食を食べる回数

平日の睡眠時間

平日のテレビの時間

平日のゲーム・ネット時間

平日のライン・メール時間

家庭学習時間

先生との思い出

関市立安桜小学校　校長
長瀬 秀子

私は、本年度六十歳を迎え、三月で退職する。

「教師になりたい」と思い始めたのは、小学校三、四年生の頃である。教えることによって、子どもたちができるようになり、喜ぶ。その顔を見ることが、たまらなく好きなのである。

私は、自分が教員になるまで、多くの教師に教えられてきた。どの先生も、私の心の中にあるが、小学校の担任の先生の思い出は、大きい。

小学校一年生の担任の先生は、四十歳くらいの男の先生であった。専門教科が国語で特に国語の時間は厳しかったことを覚えている。とにかく、こわかった。自分は叱られることは、ほとんどなかったが、叱られるとこわいだろうな、という雰囲気の先生だった。その先生から、ひらがな、カタカナ、漢字を徹底的に教えられた。とめ、はらい、はねに注意し、正しい筆順で書くことができるよう、授業中、何度も繰り返し練習させられた。私は、必死になって先生の教えについていったことを今でも覚えている。

私が、正しい筆順で書くことができるようになっていったのは、小学校一年生の担任の先生のおかげである。こわかったが、子ども心に、尊敬するものがあった。正しいことをきちんと学んでいくことの大切さを教えてくれた。

小学校四年生の担任の先生は、若くて明るい男の先生であった。外で、子どもたちとドッジボールをして遊ぶ先生であった。私は、転校生であったので、学級のやんちゃな男の子たちから、からかわれる対象になりそうであった。そんな時、担任の先生は、やんちゃな男の子たちを連れて外に出て、ドッジボールをしていた。そのおかげで、私は、いじめの対象にならなくてすんだ。

私は、ドッジボールが苦手で、積極的には遊びに入ることはしなかったが、遠くからうらやましく見ていた。ある放課後、担任の先生が、ドッジボールをしようと元気に外に飛び出して行った。その時、ランドセルを背負って帰ろうとしている私に、先生は、「いっしょに、ドッジボールやっていこう！」と誘ってくれた。とても嬉しかった。私が、うらやましそうに見ていたのを知っていたのかもしれない。だが、私は、「いいです。」と首を横に振って断ってしまった。本当は、一緒にやりたかったのである。断ってしまった後悔はあるが、声をかけてくれた先生の笑顔が今でも忘れられない。

小学校六年生の担任の先生も、厳しい年配の男の先生であった。

ある休み時間、その先生は、私に、「髪の毛をたくさんつかんでひっぱってもあまり痛くないけど、一本だけつかんで同じくらいの強さでひっぱると、ものすごく痛いね。どうしてか分かる？」と笑顔でクイズを出すように話しかけてきた。

私は、ドキドキして一生懸命答えた。私の回答を聞き、「そのとおり！」と先生は感心して言ってくれた。

今でも、髪の毛を引っ張ると、その時の会話がよみがえってくる。学習していることが生活の中にあるということをその時学んだ。

「教師の日々の何気ない言動の中に、子どもたちの成長を支えるものがある」という思いを胸に、教師としての誇りと責任をもって退職する日まで精一杯がんばりたい。

子育て半生記

関市立瀬尻小学校PTA相談役　後藤 豊郎

うばい合えば足らぬ　わけ合えばあまる

私には両親が二組いる。実の両親と嫁の両親という意味ではなく、私自身に生みの親と育ての親という意味で二組いるのである。

最近ではあまり聞かない話かもしれないが、私の家は世襲で家業を継ぐため、必ず跡取りがいる。育ての親には子どもがいなかったので、同居していた弟家族の長男を養子に迎え入れ跡取りとした。それが私である。今思えばとんでもない話だが、私の両親たちはその決断を私自身に委ねた。どっちの子どもになるのか。そんなことを当時保育園の年中だった私に決められるはずがない。だが、それでも私は選んだ。どちらか一方を選べば、どちらかが傷つく。どちらも傷つけたくないから、友だちを選んだ。「おともだちと別れたくない」と。その意味が分かってか分からずかは定かではないが、生みの両親や兄弟と別れて、父の兄夫婦の元で成長することになった。離れて暮らすことになっても、父は父、母は母である。私は二組の両親の背中を見ながら育ったことには違いない。

しかしながら、振り返ってみると自分のことではあるものの、子どもの順応性というか、適応能力には驚かされる。子ども心に、二つの親たちに気を遣いながら、自分もできるだけ傷つかないように選んだのだ。結果から言えば、傷つかないはずはないそれなりに淋しい思いもしたし、つらいこともあった。けれども思い返せば、それが当たり前でもあったあるものはある。ないものはない。それ以上でもなければそれ以下でもない。その中で生きていくしかないのである。

時は流れて、この私も結婚し、そして三人の子どもたちにも恵まれた。子どもたちの成長に伴い、地域の子供会や学校ではＰＴＡの役にもつくようになった。

初めてＰＴＡ会長をつとめたのは、東日本大震災の翌年。地域で役員を決める会合があったのは、まさに震災のその年であった。仕事の関係で震災の翌々月、五月に陸前高田と気仙沼を訪れた。炊き出しのために学校の体育館や、スポーツ施設などの避難所を訪れたのだが、そこで目にしたのは、被災された方々のたすけ合う姿。もちろん、もめ事や喧嘩なども後を絶たないと思うが、被災された方々に少しでも温かいものを、元気になってもらおうと訪れたはずの私たちだが、人々のたすけ合う姿に胸を打たれた。帰り際に「遠いところから、私たちのために、温かい食べ物を作ってくださりありがとうございました。お帰りの道中はどうぞお気を付けてお帰りください」と、避難所の方々全員でお見送りをして頂いた。まだまだ傷の癒えるはずのない、被災された方々の深い優しさに感動した。励ますはずの私たちはいつの間にか励まされていた。

書家の相田みつをさんの作品に、「うばい合えば足らぬ　わけ合えばあまる」という詞があるが、まさにその言葉の意味を感じた。

子どもたちの成長は、私たちの未来そのものである。大人には子どもたちが自立し、未来を築いていけるまで見守り育てる義務があると思う。ＰＴＡがどうのこうのという次元の話ではない。人は一人で生きていけるわけではないので、当然、誰かの世話にもなる。自分の子どもだからといって、四六時中ついて周り、導き続けるということは到底できるはずもない。その時々に学校や地域の方々にもお世話になるのであって、それが学校教育であったり、地域との繋がりだったりするのだと思う。時には自分も役割を負担しなければならなくなるときもあると思うが、しかし、そこには困ったときはお互い様の精神が必要なのであって、役を押しつけ合えば、役はあまり、助け合えば、役は足りなくなるように思えてならない。

何年か前の岐阜県ＰＴＡ連合会の定期大会で、記念講演の講師の方が、「子どもは、親が生きたように生きる」と話されていたことが今も心に残っている。言葉や方法論で人の生き方を聞かせたところで、果たして子どもたちの心に残るだろうか。むしろ、親が、あるいは大人たちが、人と人の繋がりの中でどう生きたか。何を決め、何を選んだか」その選択を自分の生きる手本として見ているのではないだろうか。大人たちの背中は子どもに嘘をつくことはできないのだと思う。

二組の両親の元で育った私だが、それぞれの両親の背中に、今の自分の人生を見つけてきたように思えてならない。さて、私自身、子育てということを改めて考えたことはなかったのだが、今が子育ての最中であることは間違いない。私も両親たちがしてくれたように、子どもたちに、私なりの生きる道を見せていこうと思う。

pleasure

イラスト&クイズ

鬼頭侑花（関市）

PN. 渡辺衣愛（羽島市）

QUESTION -1

「しか」は「しか」でも、
海にいる「しか」
はな〜んだ？

出題・三宅 晴（美濃加茂市）

《答えは45ページ》

本巣市のPTAふれあいニュース

vol.10

親子ドッジボール大会

本巣市立外山小学校PTA

私たちの外山小学校は、例年引き継ぐ伝統行事として、「親子ドッジボール大会」を開催しています。

準備と進行をPTA会員保護者が協力し合い、普段なかなかできない全校親子のコミュニケーションを図ります。アクティブな運動だけにグッと輪が縮まる活動です。子どもたちもこの大会を楽しみにしていること、本校の児童数が少人数であることにも関わりますが、チームワークが深まるのはあっという間です。

これは子どもと保護者そして先生方が、今年度だけではなく、今までに「結（ゆい）」の気持ちを引き継いできたからこそなのです。

見方によれば「あーまたあの行事か」と思われますが、把握できている伝統行事は私たちの中で説明の要らぬ行事であり、阿吽の呼吸で進行しています。誰も何も指示せずとも、誰かが必要な場所に居り、サポートがなされていきます。何という安心感でしょう！

こうした親同士の連携が子どもたち同士に繋がり、やがてこの外山を引き継ぐ輪のひとつとなるのは素晴らしいことです。

リニューアルがいっぱいの弾正小二〇一七！

本巣市立弾正小学校PTA

平成二十九年度の弾正小学校は、リニューアルがいっぱいでした。六月からは、『運動場芝生化』の工事が始まりました。広い運動場の半分以上、約三八〇〇㎡が芝生になりました。広い運動場に五十㎝間隔で芝生の苗を一万五千本植えることになりました。七月二十二日、児童・保護者・地域の皆さん、それに加えて、運動場を利用するサッカー少年団・野球少年団など約四〇〇人の方々の力で、芝生植えを行いました。

運動場に芝生の緑が広がる中、夏休みの間にすべての教室に『電子黒板』が設置されました。二学期からは、各教室で先生方はタブレットパソコンを手にしながら授業を進めています。それだけではありません。今、来年三月の完成を目指して、『体育館改修』が進められています。学校が目指す三つの心、「がんばりぬく心」、「だいじにする心」、「よりよくする心」を育む場として、弾正小学校は生まれ変わります。たくさんの子どもたちと地域の方の笑顔の中で。

芝生植えの様子

あいさつを軸にした「いしきっこ」の育成

本巣市立一色小学校PTA

一色小学校のPTA活動のテーマは、「あいさつ～いしきっこ運動～」です。「いしきっこ」の五文字を使って、「**い**つも、**し**ぜんに（自分から）、**き**もちよく（相手の目を見て）、**つ**ながるあいさつ（家族、友だち、地域の人と）、**こ**えを出そう」を目標とし、取り組んでいます。

子どもたちは、毎朝校門で元気よくあいさつをして気持ちのよい一日のスタートを切っています。PTA活動に「あいさつ運動」を位置付けて、役員の皆さんが登校する子どもたちを、あたたかいあいさつの声で迎えています。また、児童会活動としても取り組み、先に登校した子どもたちが列を作り、後から登校した仲間にハイタッチあいさつをする「あいさつボランティア活動」も行っています。

校舎内や地域では、まだまだ十分できていないという課題はあるものの、あいさつを自己アピールの手立てとして、また社会性を身につける上でも大切なものと捉えさせて、今後もあいさつ運動に励んでいきます。

「合唱祭」のオーケストラ伴奏のためにリサイクルをがんばる

本巣市立糸貫中学校PTA

糸貫中学校の伝統行事の一つに、「合唱祭」があります。第一部では、生徒が各学級で選曲し練習を重ねた合唱を交流し合います。糸貫中の「合唱祭」の特徴は、第二部で全校合唱や学年合唱をオーケストラの伴奏で歌うことです。ここ三年は、私たちPTA合唱団も数回の夜練習を重ねて合唱を披露しています。

オーケストラを招聘する費用の一部をPTAがリサイクルの収益から補助しています。地域の方にもそのことをよく理解していただき、「中学校の合唱祭のために、段ボールを集めておいたよ」と言ってリサイクルの日に出してもらえます。それを集める生徒も、車で運ぶPTA会員も「オーケストラ伴奏のために」という目的がはっきりしているので、作業に力が入ります。

年々リサイクルの収益が減額しているのが心配ですが、今のオーケストラの規模で合唱祭を継続できるよう、わが子が卒業してもPTAリサイクルを支えたいと思います。

「Fight」を歌うPTA合唱団

リサイクル活動にも力が入る

立ちどまらない保険。
MS&AD
三井住友海上

三井住友海上は、
エネルギーはつくっていませんが、
環境にやさしいエネルギーが支える
未来をつくっています。

増え続ける世界のエネルギー需要。
それに伴ってさまざまな環境問題が発生しています。
そこで注目されているのが
風力発電や太陽光発電などの再生可能エネルギーです。
三井住友海上は再生可能エネルギー導入における
リスクマネジメントや保険を提供。
エネルギーの未来を支えていきます。

未来は、
希望と不安で、
できている。

明日をつよく。
三井住友海上

www.ms-ins.com

二つの約束

川辺町立川辺東小学校PTA 母親委員長　松下 えりか

松下家の巻
78

○「ぎゅう」とすること

我が家は中三の長女、小六の長男、年中の次男の三人の姉弟がいます。塾の送迎や仕事の延長により、ゆっくり年中の子とふれあう時間がなかなかとれません。毎日一回、「ぎゅう」と抱きしめる約束をしています。「今日もよろしくね。」「今日もありがとう。」と伝えます。

保育園のお迎えが遅くなると、「今日はお迎えが遅かったからぎゅうゼロ回」と、断られる時もありますが、触れ合う時間を大切にしています。

○感謝の気持ちを忘れないこと

家の手伝いをしてくれる子どもたちや、スポ少や部活の送迎など、やって当たり前と思うのではなく、「ありがとう。」と相手に言葉で伝えるようにしています。

相手に求めてばかりではなく、自分はちゃんとやれているのかと思います。「やってくれない。」と嫌味な言い方をするのではなく、伝え方を変えるだけで相手のとらえ方が変わり、お互いが嫌な気持ちにならずに過ごせるようになりました。

話そう！語ろう！わが家の約束

忙しくても大切にしていきたいこと

瑞浪市立釜戸中学校PTA 母親副委員長　藤田 瑞穂

藤田家の巻
79

わが家は、私たち夫婦・長男（中三）・長女（小三）・愛猫の五人家族です。わが家が大切にしている約束を紹介します。

約束一　いつでもだれにでも顔を見て挨拶をする

夫婦共働きの上、子どもたちは塾や習い事で毎日バタバタしていて、家族揃って食事をとる事も週に数日しかありません。そこで家族のコミュニケーションをとるために、朝・晩・寝る前に必ずお互い顔を見て挨拶をすることにしました。中三の息子は敏感な年頃ですが、今のところしっかり守ってくれています。

約束二　愛猫の世話は家族全員で

動物を飼うと、ついつい世話をする事が母親の仕事になってしまいます。動物も生き物ですのでご飯を食べるしウンチもします。そこで、一つの命と向き合うため、猫の世話は家族全員でする事に決めました。子どもたちも率先してお世話をしてくれます。猫を通して家族の笑顔や会話が増えました。

子の思い

お母さんの仕事

海津市立今尾小学校　三年　高木 音瑠

ある日の夕方、お母さんが用事で家にいませんでした。その時わたしは、お母さんの仕事を、一度自分でやってみようと思いました。

まず、せんたく物をたたんでみました。わたしがたたむと形がへんになってしまいました。でも、お母さんは毎日きれいにたためていて、何でわたしはきれいにたためないんだろうと思いました。

次に、そうじきをかけてみました。わたしがそうじきをかけるとほこりがのこってしまいます。だけど、お母さんがそうじきをかけるとほこりがなくて家はピカピカになります。

さい後に、ばんごはんを食べるじゅんびをしてみました。食きやはしをならべたり、ごはんを運んだりしました。食べる前に準備をするのにもこんなに時間がかかるものなんだなと思いました。

お母さんは、毎日こんないそがしいことをしながら、私たちのことを考えてくれていて、ほんとうにすごいと思いました。

気持ちのよいあいさつをめざして

瑞穂市立生津小学校　六年　溝口 慶

四月のことです。新一年生の子がぼくに大きな声で「おはようございます」とあいさつをしてくれました。その日、ぼくはきげんがあまりよくなかったけれど、その一言で元気が出て、お返しあいさつをしました。

次の日の朝から、ぼくは校門の前に立ち、あいさつボランティアをしました。あいさつを返してくれない人もいました。生津小学校には、先輩達から受けついだ『なまづっこ宣言』というものがあります。それは、「人をつらい気持ちにさせることは許さない。人をうれしい気持ちにさせる行動をしよう。」というものです。あいさつは、人をうれしい気持ちにもつらい気持ちにもさせるのだなと思いました。だから、ぼくはあいさつで人をうれしい気持ちにさせてみようと思いました。

まずは、地域の人にあいさつをしました。地域の人はにっこり笑ってあいさつを返してくれました。また、「今日も元気だね。」「勉強、がんばって来いよ。」などと話しかけてくれる人もいて、顔見知りになり、会話が広がりました。

また、学校では六年生のみんなで「ハイタッチあいさつ」を全校に広げました。ぼくは、校門の前で、「ハイタッチあいさつ」で下級生を出迎えることにしました。そうすると、仲間同士目が合うようになり、今まで知らなかった下級生とも、仲良くなるきっかけになりました。ぼくは、あいさつが楽しくなってきました。『なまづっこ宣言』が、あいさつを通して全校、そして地域に広がっていきました。

あいさつをすることは、とても気持ちがよく、人と人とのコミュニケーションに欠かせないものだと分かりました。だから、ぼくはこれからも、「自分も相手もうれしくなる気持ちのよいあいさつ」を続けて行こうと思っています。そして、学校にも地域にもみんなの笑顔を広げていこうと思います。

私を成長させてくれたもの

瑞浪市立瑞浪中学校　三年　後藤 由佳

私は中学校三年間、吹奏楽部に所属していました。休みの日も練習で、正直とても大変でした。それでも今、私は吹奏楽部に入ってよかったと思っています。

吹奏楽部で過ごした中で、思い出はたくさんありますが、一番印象に残っているのは今年の夏のコンクールです。夏のコンクールの練習で、私は三年生と二年生の立場の違いを実感しました。大変だったけれど先輩についていけばよかった二年生の頃とは違い、三年生になった今年は練習を進める側の立場になりました。今年は昨年よりコンクールの曲を決定するのが遅くなってしまい、どう練習すれば短期間で目指す演奏に近付くのか分かりませんでした。また、コンクールメンバーの中で目標のずれがあり、地区大会数日前になっても、練習に緊張感がありませんでした。

その状況を変えるため、本当にたくさんの話合いをしました。時には泣くこともありました。話し合った結果、「東海一になる」、それが今年の目標になりました。それからは目標に向かってみんなの心も音も一つになっていき、東海大会に出場することができました。成績は銀賞でしたが、みんなで心を一つにして演奏でき、悔いは残りませんでした。

吹奏楽は団体戦です。一人でも欠けたらよい音楽は創れません。つらいこともあったけれど、話し合いながらみんなで一つのものを創りあげる経験は、吹奏楽部だったからこそできたのだと思います。

先日の定期演奏会で、私は吹奏楽部を引退しました。大変だったはずなのに、引退した今は少し寂しいです。

私はたくさんのことを学ばせてくれた吹奏楽と瑞中吹奏楽部が大好きです。だから、高校でも吹奏楽部に入部しようと思っています。三年間私を支えてくれた同級生、先生、後輩、保護者の皆さん、本当にありがとうございました。

親の願い

親の願いってなんだろう？

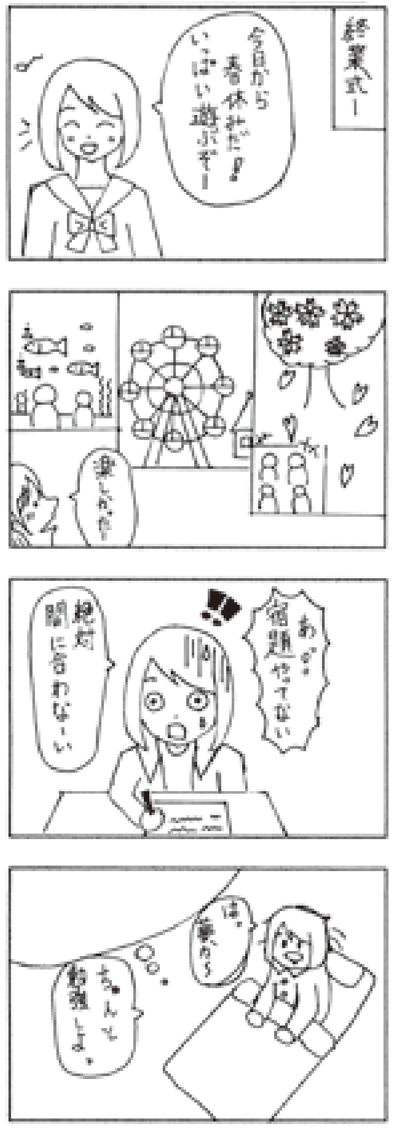
岐阜市立茜部小学校ＰＴＡ　会長　森 健一郎

今回、執筆させていただくにあたり、これまでに掲載されていた「親の願い」を再度、拝見させていただきました。皆さん、素晴らしい思い・考えを持って、親として子どもに接していて凄い！と、改めて感じたところです。

さて、我が家の子どもへの願いですが、改めて、今回の執筆を機に、しっかりと考えを整理しようと思いましたが、なかなか、まとまりません。日々、何を思って、自分の子どもに接しているのか、自分が恥ずかしくなる限りです。ただ、私が「我が子に望むこと」を考えると、いつも、思い出すことがあります。それは、私が独身時代に、会社の先輩（女性の子育て中の方です）に言われた言葉です。『親っていうのは、本当に欲張りなんだよね。子どもが産まれるときは、「元気に産まれてきてくれれば、それだけでいい」と言っていたのに、次は「早く歩かないかな」、「早く言葉を話さないかな」、小学生になれば「いい成績を取ってほしい」「レギュラーになってほしい」と、成長するほど、希望が大きくなっていく。ホント、贅沢だよね。』

大垣桜高校 まんが研究部

春休みあるある



逆さ言葉

きいろいき

（黄色い木）

出題・五十川 陽菜（揖斐郡）

独身時代には、特に気にしませんでしたが、ふと気が付けば、自分に子どもができてからは、ふと気が付けば、この言葉が頭をよぎります。確かに、今の自分に照らし合せると、子どもの成長に合わせて、子どもに「こうあってほしい」と思うことが多々ありますが、それは生まれてきた時のことを振り返ると贅沢な悩みかもしれません。そう思うと、私の願いの根幹は、「子どもが元気に成長してほしい」に尽きるのかなと思います。(「元気」の中に、色々意味が含まれるかもしれませんが)

また、自分の子どもと言っても、親とは別の「人」ですので、親は子どもが何を考えているのか、全てを理解することはできず、また、それは、子どもにとっても同様で、子どもが親の考えを全て理解することもできないと思います。(自分自身を振り返っても、自分が、親の考えを理解していたかと言われると、自信はありません。)そのように考えると、親としては、子どもが元気に成長することを願いながら、学校や友達等との環境の中で、子ども自ら成長していくことを、見守っていくことしかないと、自分に言い聞かせています。

その一方で、子どもには、周りの仲間を大切にしながら、自己肯定感をしっかりと持って、充実した毎日を過ごす中で、一歩、一歩、成長していってほしいと願っている自分もいます。親として、自らの言葉や姿で、その思いを子どもに伝えていければと思いますが、それは、子どもに望みすぎなのかもしれません。

ただ、子どもは、自らのフィールドのなかで日々成長していきますが、その中で、色々な決断や感じ方に迷ったときに、家庭内での親の姿や言葉を、自らの判断基準の一つとして捉えてもらえればと考えています。これからも、子どもの成長に合わせ、親としても、悩みのタネは色々と変わっていくと思いますが、「元気に成長してほしい」という願いを自分の心の「軸」に据えて、子どもを見守っていきたいです。

親の願いをどのように表現するのか

各務原市立鵜沼中学校PTA
小森 明

普段なかなか「親」として振り返る機会や環境がないなか、このように「親の願い」ということで振り返る時間が与えられたことは本当にありがたいと思います。

親として、日頃は自分の中で正しいと思って「親」をやっていますから、「どうだったのかな?」とふと立ち止まってみるというのもいいことですね。

では、親としての子どもたちへの願いというものはどうだったのかを考えてみました。

親の願いとしては、子どもたちの価値がより高まることを願ってきたように思います。生まれるときは、五体満足で生まれてくればいい、元気で生まれてきたらいいと願いました。赤ちゃんから保育園へ行くようになると、元気に遊んで笑顔でいてくれればいいと思っていました。小学生でも元気に学校に行って、お友達と一緒に勉強したり、一生懸命遊んでいてくれればいいといった感じでした。

では中学生になったら・・体の面では、身長が伸び、声変わりもありました。そんな成長も目に見えるものとしてはうれしいのですが、親の願いとしては、心の面、内面が大きく成長してほしいという願いが強く出てきました。

急に大人っぽくなり、徐々に親の手を離れるようになり、家外で過ごす時間も増えてきました。その反面、言葉を交わす時間、触れ合う時間という目に見える形としては減っているという現状です。

親の考えというよりも、子どもたちも自分の考えが強くなり、自分の考え、自分の価値というものを大切にしていきます。どのように自分らしさを発揮できるのかを模索しているようにも見えます。

親としては、もう手とり足とりというようにはいかないという現状で、子どもたちが自分で責任をとれるような心を持たせてあげること、そのような環境づくりが必要に思います。ですから、これまで以上に心配りをしてあげること、見えるところよりは見えないところに意識を持っていくことが必要ではないかと思わされています。

子どもの成長を信じてあげること、子どもにやりがいを持たせてあげること、安心して前進できるように勇気づけてあげること、いざというときにいつでも受け止めてあげられることが大切かなと思っています。

わずかな時間でも、心のつながりを感じていられる環境を準備しておきたいです。

親子として似ているところもあり、そんな姿を生活の中で垣間見るのも微笑ましいことですが、子ども達がどこまでも立派に成長していく姿を見ながら、親としてワクワクして一緒に歩いていけると幸せですね。

教育の窓

子どもの考え方はすごいです

郡上市立大和西小学校
教頭 冨村 竜也

今年の春、四年生の子たちと春見つけをするために、校庭を散策しました。一人の女の子が、まだ花が咲いていない葉だけの植物を指さして「これドクダミだよ。先生知ってる?」と聞きに来ました。どうして知っているのと尋ねると、「お家の人に聞いたし、家にもいっぱいあるの」と話し始めて、その利用の仕方まで教えてくれました。また、ヒメオドリコソウを見ながら、「この蜜おいしいよ」と教えてくれました。さらに、校庭を進んでいくと、ある子が「テントウムシが脱皮している」と教えてくれたので、みんなで成虫になる瞬間を観察することができ感動し合いました。少しの時間でしたが、子どもたちの生活に自然がたくさん関わっていることに驚きを感じました。

子どもたちの自然体験が少ないと言われている昨今、このように自然と密接につきあいながら育っている子どもたちがいることを知って、何より嬉しく思いました。

他にも子どもたちが自然のことでよく質問します。そんな時、私は答えを直ぐに言うのでなく、「何でだろうね」と問い返すようにしています。

ある寒い日の朝に二年生の子が「どうして土がういているの?」と質問に来ました。いつものようにどうしてだろうと問い返すと、土の様子をもう一度観察し土の下に白いものがあることに気付き、「これが土を持ち上げているよ」と答えました。そして、その白いものは何だろうと聞くと、さわってみてそれが氷であることに気付き、土を持ち上げる氷の力に感心して、その子は校舎の中に入っていきました。

別の日の朝、六年生の子が薄雲の向こうにある太陽を見て、「あれって月かな。」と尋ねてきまし

大垣桜高校
まんが研究部

ホワイトデー

逆さ言葉

るすになにする

(留守に何する?)

出題・伊藤 慎介(山県市)

た。どうしてそう思うのかと聞くと、眩しくないことと丸くて白いことから月なのかなと考えたようです。その丸いものが朝八時ごろと南東の方角に見えていたことから、やっぱり太陽だと確信したようでした。

答えを出すことなく、子どもと一緒にあれやこれやと考えていると、大人では気付きもしない子どもの考えに感心し、子どもたちと会話を楽しむことができます。私たちは日々慌ただしく生活していると周りの自然の変化を見落としてしまいます。しかし、周りの自然に目を向け、子どもたちと会話を楽しむことで、生活を十倍楽しむことができるとともに、子どもたちの考える力を伸ばせるのではないでしょうか。

応援メッセージ

大野町立揖東中学校
教頭　小野　直子

私は、小学校時代、給食が食べられない子でした。しかも、二年生～六年生までの五年間ずっとでした。昔は給食指導が厳しくて、なかなか残させてもらえず、時間内に給食を食べられない子は、次の掃除の時間まで食べさせられていたということがありました。掃除のために机をすべて後ろに移動している中で、一人ぽつんと座って、給食を前に泣いていました。元々偏食で少食だった私は、やがて給食拒否症のような状態になりました。三時間目くらいから給食の匂いがしてくると、のどが詰まるような感じになり、給食が目の前に置かれると、苦しくて胸がどきどきしました。「牛乳だけでも飲まなきゃ」と思ってふたを取るのですが、ひと口も飲めませんでした。こうして、給食はひと口も食べることができず泣いている、ということが毎日毎日繰り返されました。そんなふうだったので、私は場面緘黙のような状態にもなっていきました。人とはほとんど話さず、授業中の挙手発言なんて全然できませんでした。行事で母が作ってくれたお弁当であっても全く食べられなくなっていました。だから小学校時代は、楽しい思い出というものはほとんど記憶にないような気がします。

でも、こんな私にも転機が訪れました。中学校入学です。入学するにあたって「なんとか変わりたい」と思っていた私は、「新しい環境になるから、きっと私は食べられる」と強く強く念じていました。そして入学後初めての給食。ものすごい息苦しさを感じながらも、牛乳をひと口飲んでみました。すると、飲めたのです！自分でも不思議でした。その瞬間、パァーッと視野が開け、心が解放されたような、呪縛が解けたような感じになったことを、今でもはっきり覚えています。それからはもう、普通に給食を食べることができ、友達もでき、明るく過ごすことができました。

私は、今でこそ教師をやりながら、たくさんの生徒や保護者の方、先生方、地域の方々など、たくさんの人と関わり合って仕事をしています。小学校時代の私からは想像もできなかったことです。生徒たちにこの体験話をすると、誰しも「信じられない」「そうだったの！」と驚かれながら、「今の自分と同じや」とか「そんなふうに変われるんだね」と思ってくれる生徒もいます。

何十年も生きていれば、様々な転機やいろんな出会いが必ずあります。生きていてこそ、です。そんな人生体験を、教師はもちろん保護者の方もどんどん子どもたちに伝えていってほしいと思います。今は大人になって、子どもたちに教えたり導いたりしている立場にありますが、そんな大人たちも、子どものころはいろんなことに悩み、苦しんでいたこと、そして、それを乗り越えて今があること。そんな自らの体験を語ることで、子どもたちの心に届く『応援メッセージ』になればと思っています。

私は生徒たちに自分の話をしながら、こう伝えています。「転機は必ず訪れる」「強く願えば叶う」と。そして、今の状況がどんなに苦しくても、絶対にそれが永遠に続くなんてあり得ない、と。

3月号の

親子で はてな

Q1 ひなまつりに関する記述として間違っているものは次のうちどれでしょう。

㋐ 五人囃子は、左から右へ楽器が小さくなるように並んでいる。

㋑ ひなあられの「白」「緑」「桃」の３色は、お姫様の愛用した着物を表している。

㋒ ひな人形は、女の子の成長と健康を願うために飾る。

Q2 1991年に埼玉県の中学校の校長が作詞した、今では全国の小中学校で歌われている卒業式の定番ソングはどれでしょう。

㋐ この星に生まれて
㋑ Tomorrow
㋒ 旅立ちの日に
㋓ さよなら友よ

応募方法

応募者は、はがきで、3月末までに下記の宛先へお送りください。
（1人1枚・当日消印有効）
※クイズの答えは1問だけでもOKです。

宛先　〒500－8824
岐阜市北八ツ寺町7
岐阜県校長会館内
岐阜県PTA事務局
「わが子のあゆみ編集部」

なお、応募はがきには『わが子のあゆみ』への感想・意見やなぞなぞの問題と答え、逆さ言葉などを記入してください。

- ●3月号クイズの答え
- ●郵便番号・住所
  学校・学年・氏名
  保護者名
- ●『わが子のあゆみ』への感想・意見
- ●「なぞなぞ」の問題と答え
- ●逆さ言葉

1月号クイズ答え

Q1 ㋑

Q2 ㋐

1月号のクイズ当選者

青木　渉留（羽島市）　柳瀬　綺音（不破郡）
堀　希実（羽島郡）　五十川陽菜（揖斐郡）
伊藤　慎介（山県市）　三宅　晴（美濃加茂市）
池田　琴葉（大垣市）　平田　詩織（加茂郡）
高野　遥（安八郡）　金森　愛苗（岐阜市）
和田　智咲（郡上市）　山岡　潤惺（関　市）
長瀬　良磨（美濃加茂市）

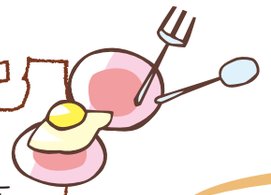
お試しクッキング

友禅ごはん

岐阜県学校栄養士会

可茂地区の学校給食で出されている人気メニューです。食材が友禅染のような彩りがきれいなそぼろごはんです。

卵や鶏肉、野菜を炒めてごはんの上にのせるだけ。簡単にできるので、朝ごはんやお弁当におすすめです。卵や鶏肉を炒める時は、5～6本の箸を使って混ぜるとポロポロになりやすく、見た目もきれいに仕上がります。甘くて、しょうがが効いているので、食欲をそそります。ぜひ試してみてください。



作り方

❶ にんじんは皮をむき千切りにする。三つ葉は2㎝幅に切る。
❷ 卵を割りⒶの調味料を混ぜ合わせる。
❸ フライパンに油を敷き、❷を入れポロポロになるように炒め、お皿に取り出しておく。
❹ フライパンに鶏肉とⒷを入れ、よく混ぜ合わせる。
❺火をつけ、鶏肉がポロポロになるように炒める。
❻鶏肉に火が通ったら、にんじんを入れて煮る。
❼❸と刻みしょうが、三つ葉を入れて混ぜ合わせる。
❽お茶碗にご飯を盛り、❼を載せて、刻みのりをかける。

材料 4人分

精白米……300g(2合)
卵……2個
Ⓐ 砂糖……小さじ1
Ⓐ 塩……ひとつまみ
鶏ミンチ……160g
Ⓑ 砂糖……大さじ1･1/2
Ⓑ 清酒……小さじ1
Ⓑ 薄口しょうゆ……大さじ1･1/2
Ⓑ おろししょうが……2g
にんじん……中1/2本(50g)
刻みしょうが……7g
三つ葉……5本程度(12g)
刻みのり……適宜
サラダ油……適宜

●栄養価（1人あたり）

エネルギー	267kcal
たんぱく質	12.6g
脂質	7.6g
カルシウム	27mg
鉄	1.1mg
亜鉛	1.2mg
ビタミンA	152μgRE
ビタミンB_1	0.09mg
ビタミンB_2	0.21mg
ビタミンC	3mg
食物繊維	0.8g
塩分相当量	1.2g

information

■作品を募集しています。イラスト・なぞなぞ・逆さ言葉などの作品を募集しています。イラスト・絵手紙はハガキに描いてお送りください。ペンネームを使う場合にも、郵便番号、住所・学年と氏名を忘れずに。写真・書写は郵送願います。なぞなぞ・逆さ言葉は「親子ではてな?」の解答とともにお送り下さい。

宛先はいずれも　〒500-8824　岐阜市北八ツ寺町7
岐阜県校長会館内「岐阜県PTA連合会・作品係」まで。

採用の分にはお礼をさしあげます。

■本誌の購読について

本誌は年間5回発行（7･9･11･1･3月）されます。年度始め（4～5月）と7月の2回、各学校PTAを通じて予約購読募集を行います（1冊200円、5冊1,000円）が、年度途中でもお求めいただけます。学校または県PTA事務局へお問合せください。

■1月号を読んで

「ＰＴＡ役員の選び方」
毎年、選考の時期になると複雑な気持ちになります。必ず、どなたかがやらないといけないとは理解しているのですが、自分の立場として考えると、やはり負担に感じてしまいます。でも今回、特集により「ＰＴＡ役員」について、改めて考え直しきっかけになったと思います。　Mさん

妻が以前、ＰＴＡの専門委員長になり、言い合いをしながら手伝った覚えがあります。委員長ばかりに負担がかかる今の在り方は、見直した方がいいと思いました。　Ｉさん

「子育て半生記」
「私たち家族の成長」の藤田佳正さんの文章に感動しました。小学校１年生の娘さんの「場面緘黙」という症状に悩みながらも、自分たちが今できること、娘さんの気持ちを大切にしながら関わり、本当にすごいと思います。これからも色々大変だと思うのですが、頑張ってほしいです。　Ｉさん

「表紙」
垂井町立宮代小学校が表紙に取り上げられており、じっくり見させていただきました。「南宮大社」の清掃、自分達も弓道部なので、12月27日に行いました。知っているところが取り上げられてうれしかったです。　Ｙさん

「親子ではてな?」
私が子どもの時から「わが子のあゆみ」がありますね。いつも、手にした時、なんとなく〝ほんわか〟とした気持ちになります。クイズの答えは、子どもと考えてみました。楽しいひと時でした。　Ｈさん

■編集後記

あの時（平成23年３月11日）から７年。筆舌に尽くしきれない地震、津波、火災、原発事故に遭遇した東日本の人々の重い思いが、伝え続けられています。昨年夏、被災地を尋ねて視察、交流した中学生13名の体験記から、今私たちがしなければならない事を知ることができます。この活動は、来年度も予定されています。活動へのご理解とご支援をお願いいたします。

５回にわたってＰＴＡの生い立ちを綴った「ＰＴＡのＡＢＣ」。ＰＴＡがどのような思いで生みだされたのか、を知る資料として連載しました。将来の日本の柱となり、眼目となる人材を育てていくために、その時、その時代の要請にどのように応えていくか。ＰＴＡは保護者を中心とした組織として、大なる責任があります。そのために単位ＰＴＡを基盤とした研修活動の充実を、さらに高めていただきたいものです。組織は、その構成員個々の見識や力量によって、発揮できる力が決まります。個々が自ら目覚め、今為すべきことを行うに限ります。「歳月は人を待たず」です。

県ＰＴＡ連合会は、来年度が創立七十周年にあたります。「ＰＴＡのＡＢＣ」は次回から、個々が、今、すべきこととして「ＰＴＡ役員の選び方実例」をお届けします。また、７月号の特集は「ＰＴＡの改革」。行事や組織や会議を「変えた」実例を紹介します。

平成最後の30年度も、「わが子のあゆみ」をよろしく。

岐阜県PTA連合会ホームページのQRコードです。「わが子のあゆみ」のバックナンバーが閲覧できます。

な ぞ な ぞ の 答 え

①アシカ

■平成30年7月号のお知らせ（予告）

特集＝PTAの改革／表紙＝兼山小／学校のたからもの＝下羽栗小･下宮小･付知北小･大和中／わが家の宝物＝川辺中／家庭教育応援団／多様性尊重の教育⑥みんないっしょに／PTAのABC⑥／保健室ノート＝上多度小／私の先生＝美濃加茂西中／半生記＝恵那西中／一冊の本＝下石小･小坂中／わが家の約束＝江名子小･美濃加茂東中／ボランティアニュース＝大和北小･大中小･白鳥小･郡南中／子の思い＝濃南小･川辺北小･岩野田中／親の願い＝武儀東小･三輪中／教育の窓＝荘川小･高田中／お試しクッキング／ふるさとの伝承＝赤坂中／きらり!キッズ!＝方県小／我らが部活＝緑陽中／私たちのPTA＝馬瀬小

わが子のあゆみ

平成30年3月1日 発行
春風号　第69巻5号
通巻第452号

頒価　200円（年間 1,000円）
＊お問合せ申込みは、各学校または右記事務局へ。

編集／岐阜県PTA連合会広報委員会「わが子のあゆみ」編集部
発行／岐阜県PTA連合会
〒500-8824 岐阜市北八ツ寺町7 岐阜県校長会館内
電話／058-262-3257　FAX／058-262-3259
ホームページ／http://www.g-pta.com
Eメール／info@g-pta.com
印刷／サンメッセ株式会社

高山市立花里小学校

ふるさとの伝承

伝統を担い、新たな伝統を創造する

高山市立花里小学校は創立して三十三年という新しい学校です。創立の年に、子どもたちと地域の絆と誇りとなる伝統を作り上げようと話し合いが行われました。

そこで始まったのが「はなのき太鼓」で、ＰＴＡや地域の方々の寄付で立ち上がりました。道具が高額でしたので一度に揃えることはできませんでしたが、特に平成七年度（開校十周年の記念事業）には一三〇万円分の寄贈をいただき、道具を充実させていくことができました。現在では約四十基の太鼓による大編成の太鼓演奏となっています。「はなのき太鼓」は老人健康施設や音楽会などで練習の成果を披露しています。太鼓を演奏する子どもたちはもちろん、演奏を聴く方々も演奏を大変楽しみにしています。太鼓演奏を通して、地域の方々との関わりを深めています。

「花里獅子」は平成十八年度から始まりました。学校の近くにある花里八幡神社の獅子舞保存会の皆様に相談したことで始まりました。現在にいたるまで指導をお願いしています。この地域で引き継がれている獅子舞を子どもたちが伝承し、子どもたちと地域がつながり、学校と地域が願いを共有して、この花里獅子は行われています。当初は厚紙の獅子頭と唐草模様の生地でできた布を使い、獅子笛は塩ビ管で制作しました。その後、木製の獅子頭を寄贈していただいたり、竹製の獅子笛をいただいたりして、どんどん本格的になっていきました。地域の祭りでも、獅子舞の担い手として活躍する子どもが現れています。

「はなのき太鼓」と「花里獅子」は校内で行われた「はなのきフェスティバル」でも披露しました。「地域に発信・地域と交流・地域とつながる」をテーマとして行ったこの行事の中で、三年生は練習の成果を披露し、伝統の「はなのき太鼓」を守っていくぞという意気込みを見せました。連綿と受け継がれていく花里小学校の伝統が、地域の活気につながっています。地域とつながり、地域の一員として関わり、積極的に地域にはばたいていく子どもたちをこれからも育てていきたいと願っています。

▲体育館で「はなのき太鼓」を練習する４年生

▲老人健康施設で「はなのき太鼓」を披露する４年生

▲「はなのきフェスティバル」で太鼓を披露する４年生

▲「はなのきフェスティバル」で練習の成果を披露する３年生

▲獅子舞を学ぶ５年生

▲獅子舞保存会の皆さんによる獅子舞の指導の様子

▲「はなのきフェスティバル」で獅子舞を披露する５年生

▼お囃子も子どもたちが行っています

きらり！キッズ！

神戸町立南平野小学校は、全校児童一七二名の学校です。本校は、神戸町の南部に位置した田園地帯で、自然環境に恵まれています。一四四年の歴史をもち地域の学校教育に対する愛着が強く、期待も大きいです。学校の教育目標「ハリウオのようにきいき　なかよく　がんばる子」をめざして様々な活動に取り組んでいます。今回は、保護者や地域の方が参加する活動の一部を紹介します。

歌声発表会

六月に「歌声発表会」を開催しました。本校は、みんなの心を一つにして合唱をすることを大切にしています。そこで、二年前より、学年ごとに日頃練習してきた合唱を保護者、地域の方に披露しています。音楽の授業だけでなく、朝の会や帰りの会、休み時間などにも自分たちで声をかけ合いながら自主的に合唱の練習をして、曲を創り上げました。当日は、子どもたちの美しい歌声が会場に響き渡り、大きな拍手をいただくことができました。

祖父母参観

十月には、祖父母参観を実施しました。本年度は、ＰＴＡ成人委員の企画により、岐阜県レクリエーション協会と大垣市レクリエーション協会の方に来ていただき、子どもとおじいさん、おばあさんが楽しく交流できる「ふれあい活動」を行いました。

コミュニケーションゲームやミナモ体操などをして、楽しい時間を過ごすことができました。最後に、子どもから、感謝の気持ちを込めた手紙を渡しました。おじいさん、おばあさんが、子どもからもらった手紙を温かい眼差しで読んでいる姿が印象的でした。

おじいさん、おばあさんに授業を見ていただきました。

◀授業参観

ふれあい活動▶

おじいさん、おばあさんとゲームをして楽しくふれあうことができました。

いずみ祭

十一月には、地区公民館・ＰＴＡ・学校の三者が連携して「いずみ祭」を実施しました。公民館活動では地域の講師を招い「神戸音頭体験教室」「凧づくり教室」を行い、ＰＴＡ活動では子で作った弁当を食べる「ふれあいランチタイム」を行い、学では各学年で、生活科や総合的な学習で学んできたことを発する「学習発表会」を行いました。

活動を通して、家族とふれあったり、ほめてもらったりすることで、どの子も笑顔いっぱいの一日になりました。

▼神戸音頭体験教室

神戸町に伝わる神戸音頭を教えてもらい、とても良い経験になりました。

▼ふれあいランチタイム

家の人と一緒に作った弁当は、いつも以上にとてもおいしかったです。

地域講師から、凧づくりの歴史や作り方を教えていただき、家の人と一緒に作りました。

◀凧づくり教室

学習発表会▶

生活科や総合的な学習で学んだことを聞く人に分かりやすく工夫して発表することができました。

「気球に乗ってどこまでも」を全校の心を一つにして合唱しました。

▲学年合唱

◀インタビュー

合唱後のインタビューでは、たくさんのお褒めの言葉をいただきました。

▲全校合唱

学級で何回も練習してきた合唱を皆さんに見ていただきました。

夢中！熱中！我らが部活

下呂市立下呂中学校

教育目標は「ひとり歩きできる生徒」。
全校220人の学校です。
部活動においても、望ましい人間関係を育成し、
生徒の自主性、協調性、責任感、連帯感といった社会性を育てることが一番の目的です。
3年生が引退し、新チームとなって約半年。「温故知新」を合言葉に、1・2年生は3年生から受け継いだ部活動の精神を大切にしながら、日々の活動に励んでいます。

野球部

【目標】全国大会出場

僕たちは、3年生からあきらめない心と感謝の気持ちをもってプレーすることの大切さを学びました。その気持ちをしっかりと引き継ぎ、全国大会出場をめざして日々の練習に励んでいます。さらに強くなるために、仲間とともに勝利への道を追求していきたいと思います。

陸上競技部

【目標】市大会男女アベック総合優勝、県大会全員出場、東海大会10人以上出場

3年生の先輩は、最後まであきらめない姿を私たちに残してくださいました。私たちもその姿を大切にしながら、さらに強くなるための方法を自分たちで考え、行動するように努めています。14人という少ない部員ですが、前年度の9人を超える10人が、今年の東海大会に出場できるようがんばります。

女子バレーボール部

【目標】地区大会制覇・県大会出場

私たちは、声を出し良い雰囲気を作っていくことの大切さを、先輩方から学びました。今年はそれを受け継ぎ、練習の意味を考えながら、常に試合を意識して練習しています。また、積極的に仲間に声を掛けていくことで、ムードを高めていくことも心がけています。メンバーは6人ギリギリですが、仲間を信じて目標を達成できるようがんばります。

剣道部

【目標】強くやさしい人間に

「強くやさしい人間に」という合い言葉を、先輩方から引き継ぎました。部員はわずか6人ですが、挨拶と互いに声を掛け合うことを大切にし、剣道を通して強くやさしい人間になれるよう日々練習に励んでいます。中体連は人数のハンディがあり、一人ひとりにかかる負担は大きいですが、全員で乗り越え、夏は笑顔で終われるようにがんばります。

男子バスケットボール部

【目標】市・地区・県大会優勝、東海挑戦

僕たちは、伝統である粘り強いディフェンスと気迫のルーズボールを引き継いでいこうと、毎日の練習に励んでいます。目標の東海挑戦をするために、日常から切り替えの早さをチームで大切にしています。また、試合で勝つために、コート内でのポイントの声や、指摘の声を掛け合っています。声と心に磨きをかけ、周りに感動を与える、県でNo.1のチームになります。

男子バレーボール部

【目標】県大会ベスト8

男子バレーボール部は、部員8人で活動しています。今年の目標は「県大会ベスト8」です。パスやフットワークだけでなく、先輩方から受け継いだお互いを励ます声や盛り上げる声をたくさん出してボールをつなぎます。日常生活でも「自分から動く」ことを大切にして、誰からも応援されるチームになり、必ず目標を達成させます。

吹奏楽部

【目標】東海大会出場

先輩方は、先生に言われてからではなく、常に自分たちが何をすべきか考えて、指示を出してくださっていました。私たちも先生に言われたことをただやるのではなく、「次はこれをやろう!」と自分で考えて動いていけるような部活にします。そのために、部長・副部長を中心とした2年生が、責任をもって活動します。そして、感動してもらえる演奏をします。

男子ソフトテニス部

【目標】団体戦地区突破、県大会挑戦

男子ソフトテニス部は、先輩方から練習中の声と素早い動きの大切さを受け継ぎました。部員はわずか8人ですが、地区で勝ち上がっていくために、部活の中だけではなく、日常生活や授業の挨拶なども意識しています。部活と日常の両方を大切にすることで、目標を絶対に達成します。

女子バスケットボール部

【目標】県大会出場

先輩方は、声を出すことと、感謝の気持ちを伝えることの大切さを教えてくださいました。その精神を私たちは引き継ぎ、ただ声を出していればいいというのではなく、次につながるアドバイスの声や、辛いときでも自分たちのリズムを生み出せる励ましの声を、特に大切にしています。「声」にこだわり、仲間とともに県大会出場を目指します。

美術部

【目標】全員入選

美術部はこれまでも全員入選を目指して、多くの作品展に出展してきました。また、個人制作だけでなく、地域での活動にも参加しました。下呂市農務課から依頼されたポスター制作や、イベントでのライブアート活動も行いました。これからも、学校や地域に貢献できる美術部を目指します。

女子ソフトテニス部

【目標】市大会・地区大会連覇、県大会ベスト4

女子ソフトテニス部では、中体連市大会・地区大会団体優勝を目標として、日々練習に励んでいます。先輩方から学んだ、「声を掛け合い、仲間と共に高め合っていく」ということを大切にしながら、礼儀や挨拶にこだわって取り組んでいます。団体・個人とも目標を達成できるよう、仲間とともにがんばります。

卓球部

【目標】市大会で男女とも団体優勝、県大会出場

私たちは、先輩方からいつでも全力で取り組み、粘り強く攻めていく姿を学びました。その姿をしっかりと引き継ぎ、練習から仲間同士でいろいろと指摘し合うことを心がけています。互いに声を掛け合い、チームワークと本気の練習を積み重ねて、男女ともに県大会出場を目指します。

駅伝部

【目標】県大会優勝、全国大会出場!!

今年度の駅伝部は、個人の伸びが大きく、それが男女県大会アベック出場、男子県大会3位という結果に結びつきました。それは、3年生の先輩方を中心に自分で考えて動いたり、仲間同士切磋琢磨しあったりした成果です。僕たちは、そんな先輩方の姿を引き継いでさらに高め、来年度は男女で全国大会出場を実現させます。

私たちのPTA

美濃加茂市立山之上小学校PTA

PTAスローガン

豊かな心と笑顔あふれる子どもたちを育てよう

山之上小学校校舎

学校紹介

山之上小学校は、明治六年に開校され校門前には、樹齢一〇〇年を超える「けやき」の木がシンボルとしてそびえています。全校児童一四〇名の小さな学校です。

学校の教育目標は、「けやきのようにたくましい子～けんこうな子・やさしい子・きたえ学ぶ子～」です。

PTAは「豊かな心と笑顔あふれる子どもたちを育てよう」をスローガンに、「あいさつで笑顔があふれる学校」「元気で活発な子どもたちの育成」「家庭読書・家庭学習の充実」「地域とのふれあい・交流」に重点を置き「すべては子どもたちの笑顔のために」という思いで活動をしています。

PTA活動について

○あいさつで笑顔があふれる学校

毎月一日と十五日に保護者が子どもたちの登校時間に合わせて、通学路の五か所に分かれてあいさつ運動をしています。さらに五月・九月・一月には「あいさつ週間」を設定し、校門前の大きなけやきの下で全校児童とあいさつを交わしています。

この「あいさつ週間」では、子どもたちが楽しみながら元気よくあいさつができるようにとあいさつカードを作り、大きな声であいさつができた子にはシールを貼ります。

あいさつカード

チャレンジクラブ　軽スポーツ

あいさつ運動

○元気で活発な子どもたちの育成

毎年春と秋二回、PTA本部と家庭教育学級の共催でチャレンジクラブが行われます。

軽スポーツやサイエンスショップなど、親子で参加したり先生方にも参加していただいたりして、毎年大いに盛り上がります。

このチャレンジクラブを通して、子どもたちは目を輝かせ、「もっとやりたい！もっと知りたい！」という意欲をみせるなど参加した誰もがワクワク・ドキドキできる活動になっています。

チャレンジクラブ　サイエンスショップ

トトロ読み聞かせ

○家庭読書・家庭学習の充実

母親委員会を中心とした読み聞かせボランティア「トトロ」は今年で十七年目を迎えます。

「読書の機会を少しでも与えたい」「子どもたちと本をつなぐお手伝いをしたい」そんな思いのもと、当時のPTA母親委員会の皆さんが中心となってお話ボランティアを募り、読み聞かせの会を開いたのが「トトロ」の始まりです。

このような活動で、子どもたちが本に関心をもち、家庭読書をする機会が増え、さらには家族とのふれあいが増えるきっかけになればと願っています。

○地域とのふれあい・交流

PTAでは、毎年秋に開催されるふるさと祭りを地域の皆様へ日頃の御礼をする機会ととらえ、本部を中心に、全PTA役員の参加で飲食類の販売・提供をしています。

ふるさと祭り一番の活動は、「山菜おこわ」の販売です。これは五年生の児童が総合的な学習の時間で取り組む「米作り」で育て収穫した餅米を使い、六〇〇食もの「山菜おこわ」を用意します。

日頃お世話になっている地域の見守り隊の方、子ども一一〇番の家の方には無料配布をし、残りは事前予約と当日販売をしており、作ったおこわがすべて完売になるほどの好評をいただいています。

様々な活動を通して、子どもたちの見せる笑顔は山之上の宝であり、何ものにも代えがたいものです。これからも、学校・家庭・地域が常に連携して取り組み、山之上小学校PTAの伝統を守りながら、新しいことにもチャレンジしていくPTAを目指していきたいと思います。

ふるさと祭りおこわ調理

ふるさと祭りおこわ販売

がんばる子らの
汗と笑顔と眼差しと

岐阜市立境川中学校

体育大会　団結して頑張るぞ！

心を込めて力を込めて

明るい楽しい通学路が一番

点とったぞぉ！中体連夏季大会

わが子のあゆみ

2018.3 No.452 春風号

第69巻5号

発行 ： 岐阜県PTA連合会
〒500-8824　岐阜市北八ツ寺町7　岐阜県校長会館内
編集 ： 岐阜県PTA連合会広報委員会「わが子のあゆみ」編集部
頒価 ： 200円　年間1,000円
この刊行物は一部岐阜県からの助成金を受けています。